

月しばらく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想ひを爲し、或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけてつなぎとめんとす。天台曰く天月を識らずして唯だ池月を觀る等と云々。

二九 法佛不二の本佛を欺じて迹執を斥く

この處は、前段の本佛顯本に由りて、法界觀人身觀も俱に成立し、本佛は全く法佛不二にして、佛身觀上に法界の實相を立し、而して法佛不二の本佛光顯せられたる時は、爾前諸經の佛身觀は一時に根柢を失ひ、皆是れ水月に同じきを證し、諸宗の徒この義を領悟せざるは、恰も猿猴の水月を取らんとすると一般なるを明す。かうてかへりみれば、とはこの文の相連に注意すべし、日蓮聖人の本佛觀は單に佛身觀上の議論にあらずして、法界觀も人身觀も一切皆この一事に依りて成敗し去るなり。この絶對の本佛一たび光顯せば、この顯本の智眼より立還つて、爾

前諸經に存する佛身觀を照すに照々として菴羅華を掌中に轉ずるが如きのみ、復何ぞ區々不透明の佛身觀を云云せんや。例せば村上專精氏の佛陀論に諸種の佛身觀を羅列するも、その適歸を論ずるに至りては、淨土門の立場よりすれば、彌陀は絶對なり、眞言宗の立場よりすれば、大日は絶對なり、法華宗の立場よりすれば、釋迦は絶對なりと云ひ、而して佛敎全體を通じての本旨を決定する能はず、若し各々の立場を是認せば、是正しく佛身の分裂觀を是認するなり、何の統一か之あらん、而もその書は題して佛敎の統一論と云ひ、佛陀の統一觀を明さんとすと言ふ、何ぞ其れ矛盾の甚しきや、氏が斯くの如き失態を暴露する所以のもの、他なし、是れ氏が不明の失にあらず、氏が法華顯本の佛身觀に達せざるの致す所なるのみ、氏は現時佛敎界の學者を以て許さる、而も尙ほ斯くの如し。故に本佛顯本の敎義に達せざる佛陀論の價值なきは明かにして、又佛陀論に精通せざる學者の説の佛敎解釋の上に價值なきは論なき所なれば、苟も佛敎を信じて之を宣傳せんとする者は、速に陋習と慢幢とを捨て、翻然として聖人の高敎に拜跪すべし、この顯本の見地より立還つて見れば、華嚴の佛身觀たる蓮華臺上の釋迦十方

の諸佛の雲集せる阿含の佛身觀たる生身丈六の小釋迦又は方等經般若經金光明經阿彌陀經大日經等に現はれたる佛身は、皆是れ權說方便の上に存する假定の佛身にして、此の壽量顯本の本佛の天月が暫らく影を大小の器に浮ぶるに外ならず、然るに諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想ひを爲し、或は入つて取らんと思ひ、或は繩を以て繋ぎ止めんとするなり。彼等が自宗に迷ふとは、彼々の經々の本旨は前に已に述べしが如く、小乘阿含は時間的に釋迦中心の意義を明かにし、權大乘の諸經は空間的に釋迦中心の教義に歸向せんとす、彼々の經々は全く斯くの如くにして、一切教統一の素地を造れるに彼々の學者等は、この本旨を領知せず、權經の本旨すら會得する無し、故に近くは自宗に迷ひと云ふ。而して遠くは法華經壽量品の本旨に達せず、二重の謬見に由つて佛敎を攪亂し、恰も猿猴の水月を見て、實の月の水に溺ると思ひ、或は井に入つて取らんとし、或は繩を以て繋ぎ留めんとし、遂に水中に溺没して、徒死するが如し。故に曾て天台智者大師は之を評して、天月を識らずして、但だ池月を觀ると云へり。この誠告は深く留意すべき所なり、今、左に

その證文を摘出すべし。

今世より已前本來より已後の中間の行々は、悉く是れ方便なり、故に知んぬ是れ迹因なり。若し迹因を執して本因と爲さば、是れ迹を知らず、亦本を知らざるなり。天月を識らずして、但だ池月の若しは光若しは桂、或は輪を觀るが如し。下に准じて上を知れ、光をば智妙に譬へ、桂をば行妙に譬へ、輪をば位妙に譬へ、若し迹中の三妙を識れば、迹を拂つて本を顯はすに、則ち本地の因妙を知るべし、と影を撥ひて天を指すが如し、云何ぞ盆に臨まば天漢を仰がざる、嗚呼、聾聵^{ろうろう}爲ぞ道を論ぜん耶。

若し是れ本果ならば、何ぞ今日始めて成ずることを得ん、本果は一果一切果なり、何ぞ前後差別不同なることを得ん、今世より前、本成の後百千萬億の行因得果生を唱へ、滅を唱ふることを、悉く是れ中間なり、拂つて方便と爲す、寂滅樹王何ぞ迹に非ざることを得ん。若し迹の果を執して本の果と爲さば、斯れ迹を知らず、亦本を知らざるなり、本より迹を垂るゝこと、月の水に現ずるが如く、迹を拂つて本を顯はすこと、影を撥ひて天を指すが如し、當に始成の果は、皆是れ迹

果なりと接ひて、久成の果を指すは是れ本果なり。此の如く解せば、中間の果の疑、飄然として皆盡き、長遠の信、其の義明かなり、迹の本は本に非ず、本の迹は迹に非ず、迹本殊なりと雖も、不思議一なり。(文句九)

この文句の文は壽量品の下に於て、本因本果を論ずる所にして、この文を明瞭に理解し更に進んで開目鈔の妙旨に到徹するを要す、若しこれ等の文旨に迷はば、開目鈔は永久にその手に入らざるべし、篤學の士の奮勵すべき所なり。

日蓮案じて曰く、二乗作佛すら猶ほ爾前づよに覺ゆ、久遠實成は又なるべきもなき、爾前づりなり。其の故は、爾前法華相對するに、猶ほ爾前こわき上、爾前のみならず、迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出壽量の二品を除いては、皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷、其の外の法華前後の諸大乘經に、一字一句もなく、法身の無始無終は説けども、應身報身の顯本は説かれず、いかに廣博の爾前本迹涅槃等の諸大乘經を

ば捨て、唯だ涌出壽量の二品には付くべき。

三〇 久成の取捨を評して報應顯本を明す

この處は、久遠實成の教義は一切教中、唯だ法華經本門の涌出壽量の二品に限るを示し、この二品已外は皆悉く始成の説を存するが故に、之が去就に惑ふ者あるべきを辨じ、又涌出壽量に於ける顯本は應身報身の顯本にして、法身常住の義にあらざるを示す。

日蓮案ずるに二乗作佛すら法華經に限りて餘經には之を許さざるが故に、多に就て少を捨つるの情より云へば、爾前諸經の不成佛の説に、加擔せんとする者多かるべし、況してや久遠實成の教義に至りては、更に爾前諸經に従はんとする情強かるべし。ずりとはすべり墮つる意にして、卑き諸經に墮ち込むべしとなり。何故に爾前の始成の説に墮ちて、久遠實成の義は奉持せざるやと云ふに、爾前と法華とを相對するに、前に言ふが如く、彼は多時多經にして、凡情としては之に牽かれ易し。加ふるに法華經の迹門十四品も始成久成に就ては一向に爾前の始成に同意せり。本門十四品も涌出壽量の二品を除いて餘の十二品は、皆悉く始

成の説を存せり、雙林最法の大般涅槃經四十卷も、その外の法華經の前後に説かれし諸大乘經も、皆悉く法身の無始無終は説けども、應身報身の顯本は説かれず。一字一句も無くとは、残らずの意にして、經文悉く法身常住を明すを云ふ。法身の常住とは人格實在にあらざ、法身は法爾自然の身と云ひ、この場合には普遍我を指す、故に衆生の佛性、法界の眞如に名くるなり。應身報身の顯本とは人格實在の義にして、智悲具足の如來の常住を説くを云ふ、就中應身の慈悲活動を貴むが故に、之を應身常住と云ふ。印度出現の應身に限るにあらざ、人格の如來の慈悲より起つて教化の爲に活動を持続せるを應身常住と云ふ。而してこの應身報身の顯本は二品にのみ顯説す、故に凡情としては爾前本迹涅槃等の諸大乘經をば捨て、但だこの二品に就くは難中の難なり、之が爲めに諸宗の謬見は起り、或は華嚴の盧舍耶佛を崇め、或は眞言の大日如來を尊び、或は淨土の彌陀如來を信ずるに至り、而して釋尊に即して久成本佛を顯本し之に絶對の歸依を捧ぐべきを領せず、紛々として異論を生ずるに至れり、是れ畢竟壽量顯本の大事に到徹せざるの致す所なり。この開目鈔の文旨を領會するには左の遺文を對照して

更に審思するを要す。

日眼女釋迦佛供養鈔、三界の主、教主釋尊一體三寸の木像造立の檀那日眼女、御供養の御布施前に二貫今一貫なり云云。法華經の壽量品に云く、或は己身を説き、或は他身を説く等と云云。東方の善徳佛、中央の大日如來、十方の諸佛過去の七佛三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天、月天、明星天、北斗七星、二十八宿、五星、七星、八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神地神、山神海神、宅神里神、一切世間の國國の主とある人、何れか教主釋尊ならざる。天照大神、八幡大菩薩も、其の本地は教主釋尊也。例せば、釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮ぶ者なり。釋尊一體を造立する人は十方世界の諸佛を作り奉る人なり、譬へば頭をふればかみゆるぐ、心はたらけば身うごく、大風吹けば草木しづかならず、大地うごけば大海さはがし。教主釋尊をうごかし奉れば、ゆるがぬ草木やあるべき、さわがぬ水やあるべき(遺一八三〇)

法華眞言勝劣鈔、問ふて云く、若し爾らば五百塵點は際限あれば有始有終也、

無始無終には際限なし、然れば則ち法華經は諸經に破せらるゝか如何。答へて云く、他宗の人は此の義を存す、天台一家に於ても此の難を會通する者有りがたきか。今大日經並に諸大乘經の無始無終は、法身の無始無終也、三身の無始無終にあらず、法華經の五百塵點は、諸大乘經に破せざる、伽耶の始成之を破りたる五百塵點也、大日經等の諸大乘經に全く此の義なし。(遺五〇〇)

されば法相宗と申す宗は、西天に佛滅後九百年に無着菩薩と申す大論師有ましき、夜は都率トウソツの内院にのぼり、彌勒菩薩に對面して一切聖教の不審をひらき、晝は阿輸舍國にして法相の法門を弘めたまふ。彼の御弟子は世親護法、難陀、戒賢等の大論師なり、大日大王頭をかたづけ、五天幢を倒して此に歸依す。支那國の玄奘三藏月氏にいたりて十七年、印度百三十餘の國々を見き、て諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王にさづけ給ひ、肪尙光基を弟子として、大慈恩寺並に三百六

十餘箇國に弘め給ひ、日本國には人王三十七代孝徳天皇の御宇に、道慈道昭等ならいわたして、山階ヤマノキ寺にあがめ給へり、三國第一の宗なるべし。此宗の曰く、始め華嚴經より終り法華涅槃經にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は永く、佛になるべからず、佛語に二言なし、一度永トウ不成佛と定め給ひぬる上は、日月は地に落ち給ふとも、大地は反覆するとも、永く變改あるべからず。されば法華經涅槃經の中にも爾前の經々に嫌ひし無性有情性決定性を正しくついでして、成佛すとは説かれず。まづ眼を閉ぢて案ぜよ、法華經涅槃經に決定性、無性、有情正しく佛になるならば、無着、世親ほごの大論師、玄奘慈恩ほごの三藏人師、これを見ざるべしや、これを載せざるべしや、これを信じて傳へざるべしや、彌勒菩薩に問ひたてまつらざるべしや、汝は法華經の文に依る

やうなれども、天台妙樂傳教の僻見を信受して、其の見を以て經文を見る故に、爾前に法華經は水火なりと見るなり。

五諸師佛教の網格迷ふて愈謬亂するを明す

一 法相宗を評す

この處は、二乗作佛に就て法相宗を評するなり。開目鈔は二乗作佛と久遠實成の二大教義を提げて、一切經を批判し、又諸宗を評論す、而して二乗作佛に就ては法相宗の決定性の二乗不作佛に對比し、久遠實成に就ては華嚴の盧舍那眞言の大日に對辯するなり。さればと前を承けしは、前に二乗作佛すら猶ほ爾前づよにたぼゆの文より來れり。法相宗は大乘宗なるも、無着菩薩を初めとして世親等の大論師並に玄奘慈等の三藏大師の如き高僧出でて、この宗を弘め又我國には道慈道昭等の諸師之を傳ふ、故に三國第一の宗旨たるの觀あり。而してこの宗の主張は前に擧げしが如く、五性各別を論じて菩薩性緣覺性聲聞性不定性無性の五種に分ちこの中に無佛性の衆生と決定性の二乗はと一切教中に成佛を

許さず法華涅槃にもその文なし、法華の二乗作佛は不定性の人に就て言ふのみ、涅槃の悉有佛性も前の二種の人は除外せらると云ひ法華經の二乗作佛を以て權實分判の標準と爲すは、天台已下の誤解なりと主張す。之に對する聖人の意見は後にしせり。

無着菩薩の傳は西域記五に出て、世親菩薩には別傳あり、難陀論師の傳は唯識述記一に出て、戒賢論師の傳は西域記八に出て、戒日大王の事も西域記十一に載せたり。玄奘三藏滯印十七年の事は西域記十二に出て、太宗は唐の高祖なり玄奘三藏の傳は續高僧傳の四と五に詳かなり、慈恩大師の傳は別傳十卷あり、又宋高僧傳四に出づ、肪尙光基とは神肪、嘉尙、普光、窺基の四人なり、何れも慈恩傳に出づ、法相宗の我朝に傳はりしは、道昭人王第三十七代孝德夫皇の御宇に入唐し、玄奘三藏より傳へて歸朝し、又玄肪第四十四代元正天皇の御宇に入唐し、智周法師に學び、在唐二十年の後、第四十五代聖武天皇の御宇に歸朝せり。これより先き義淵入唐して智周より傳へ歸りて、行基、道慈、玄肪、宣教、良辨、良敏、行達、隆尊に授けたり。山階寺とは興福寺のことなり、山城山階の郷に在り。

又三身の解に就ては、金光明經の玄義に左の如く出づ。身とは即ち聚集の義謂く諸法を聚集して身を成ずる也。所謂理法聚を法身と名け智法聚を報身と名け功德法聚を應身と名く。初住の菩薩より法性の理を顯出す妙覺の極果に理に方圓を聚むるを法身と名け。初住の菩薩より終り妙覺の極果に至つて智に方圓を聚め智に由つて理に契ひ、此の身を報得するが故に報身と云ふ。初住の菩薩より終り妙覺の極果に至つて、功德の法に方圓を聚むるが故に、能く機に隨つて應現し、種々の法を説いて諸の衆生を度するが故に應身と名くと。

華嚴宗と眞言宗は法相三論にはにるべくもなき超過の宗なり。二乗作佛、久遠實成は法華經に限らず、華嚴經大日經に分明なり、華嚴宗の杜順、智儼、法藏、澄觀、眞言宗の善無畏、金剛智、不空等は天台傳教にはにるべくもなき高位の人、其の上善無畏等は、大日如來より糸みだれざる相承あり、此等の權化の人いかでか誤りあるべき隨つて華嚴經には、或は釋迦佛道を成じ已つて、不可思議

劫を経たりと見る等と云々。大日經には、我れは一切の本初なり等と云々。何ぞ但だ久遠實成壽量品に限らん。譬へば井底の蝦カマが大海を見ず、山左ヤマサが洛中を知らざるが如し。汝但だ壽量の一品を見て、華嚴大日經等の諸經を知らざるか。其の上月氏尸那新羅百濟等にも、一同に二乗作佛、久遠實成は法華經に限ると云ふか。

二 華嚴眞言兩宗を評す

この處は、久遠實成の教義に就て、華嚴眞言の兩宗を批評せんとす、この兩宗は久遠實成を否認せずして、寧ろ自宗の依經にもこの義ありと主張するを明す。華嚴眞言の兩宗は、大乘宗中に於ても、法相三論に超過せる高等の宗派なり、而して兩宗は久遠實成の義は拒否せずして、この義は法華經の獨占にあらず、自宗の依經たる華嚴經大日經にも分明に之を説けりと云ひ。且つ兩宗の先德杜順、已下善無畏、已下の人々は、天台傳教已上の高位高德の人なりと云ひ、又善無畏等は、大

日如來より一糸亂れざる相承ありと唱へ、而してこれ等は皆權化の人、即ち菩薩の人界に降誕せる者なれば、斷じて佛教觀に誤解なしと云ひ、華嚴宗は久遠實成の經證として、華嚴經八十の卷に出でたる成道し已つて不可思議劫を経たりと見るの經文を擧げ、眞言宗は大日經轉字輪品に出でたる我れは一切の本初なりとの文を引き、以て久成の説は壽量品に限るにあらず、我が依經の中にも之れありと主張し。且つ顯本の説は壽量に限ると云ふを嘲つて、井蛙樵夫に比し、月氏尸那新羅百濟にも、久成は壽量品に限ると言ふ人なしと唱へ、以て壽量顯本の大事を紛淆に付せんとす。然れども華嚴經の文は機見の不同を示すに過ぎず、普賢菩薩の頌にして經の本文には或見或見と書し、或は釋迦佛道を成じ已つて不可思議劫を経ると見、或は今始めて菩薩となつて十方に衆生を利益すると見、或は此の釋師子の諸佛を供養して道を修行すると見、衆生の心に隨つて皆示現すると見ると説くものにして、壽量の顯本に於て、三世十方周遍の大利益を攝收して、今の釋迦牟尼佛の上に統一し來たるとは、全然差異あるを知るべし、加之華嚴經には前に擧げしが如く、三處まで始成正覺の説を存し、その明文今現に昭々た

り。又大日經字輪品の我一切本初の文は諸佛の本初不生を説く文にして、所謂法身の實在に過ぎず、故に文は阿字の本不生と並べて之を説くものにして、法性常住に異ならず、壽量品の顯本は應身報身の顯本なり、人格實在の妙義なり、法性常住の文を以て報應顯本に混じ、法性常住を以て人格實在に同ぜんとす、その失當なること極めて分明なり。又自宗の先師を推尊し、誤謬なかるべしと云ふは、無批評の俗論にして探るに足らず。又三國の先師にこの義なしと云ふは、凡師を以て法華の金言を疑ふものにして、輕重顛倒の見知るべきのみ。杜順の傳は續高僧傳三十四に、智儼の傳も同書同卷に、法藏の傳は宋高僧傳五に、澄觀の傳も同書同卷に出づ。

されば八箇年の經は四十餘年の經々には相違せりといふとも、先判後判の中には後判につくべしといふとも、猶ほ爾前づりにこそをばうれ。又唯だ在世許りならば、さもあるべきに、滅後に居せる論師人師多くは爾前づりにこそ候へ。かう法華經は信

じかたき上世もやうやく末になれば、聖賢はやうやくかくれ、迷者はやうやく多し、世間の淺き事すら猶ほあやまりやすし、何に況や出世の深法誤りなかるべしや。犢子方廣が聰敏なりし、猶ほ大小乘にあやまてり。無垢摩沓が利根なりし、權實二教を辨へず。正法一千年の内は在世も近かく月氏の内なりし、既にかくの如し、況や尸那日本等は國もへだて音もかはれり、人の根も鈍なり、壽命も日あさし、貪瞋癡も倍增せり、佛世を去つて年久し、佛經皆あやまれり、誰の智解か直かるべき。佛涅槃經に記して云く、末法には正法の者は爪上の土、謗法の者は十方の土とみへぬ。法滅盡經に云く、謗法の者は恒河沙、正法の者は一二の小石と記しをき給ふ。千年五百年なんごにも、正法の者ありがたからん、世間の罪に依つて惡道に墮つる者は爪上の土、佛法によつて惡

道に墮つる者は十方の土、俗よりも僧、女より尼、多く惡道に墮つべし。

三 佛教愈謬亂するを明す

この處は權教實教の分判に迷ふて、佛教愈紛亂するを明す。八年の法華と四十年の諸經とは、佛身觀に於ては、久遠實成の大事に就て、人身觀に於ては二乗作佛の有無に就て、大なる相違あり、而して先判たる權教を捨て、後判たる實教に就くは當然なりと教ふとも、猶ほ且つ凡情としては、爾前の方便説に落ち行くの習辭を脱せず。この二大教義は、佛教經典の上に於て、その去就進退に惑ふのみならず、滅後の論師人師の多くが、既に爾前づりなれば、之が爲に更に正當なる判斷を得ること難きを致せり。斯くの如くにして、法華經の實義は信ずること難く、隨つて佛身觀上の本佛、人身觀上の人開會の信解に立つ者少なく、その上世も次第に末代に及んで、佛徒中には凡僧俗侶のみ多くして、聖者賢哲は漸次に出でず、迷者俗物極めて多くなりぬ、世間の賭易き淺近の事すら、猶ほ誤まり易し、佛法の深義に對して、取捨を誤まる者多きは、止むなき事なるか。曾ては犢子方廣の

如き聰敏を以て稱せられし人すら、猶ほ大小乗の分別を謬まり、無垢摩沓の如き利根なりし人すら、權實二教の分界を辨知せざりき。正法一千年の内は佛在世を去る遠からず、且つ佛世尊出現の地たる印度なりしに、而も既に斯くの如き混亂を來たせり、況や尸那日本に傳はりては、國も隔て言語も異なり、人は鈍となり、壽は短なり、加ふるに貪瞋痴の煩惱は倍增して、人は我執妄見に囚はる。故に嚴格に批判せば、佛經に對する見解は悉く謬見に墮つと謂ふも過言にあらず、誰の智解か正直にして正統を得たりと爲すべきか、その適從する所を知るに由なし。故に佛は涅槃經に佛法を正解して、正信を得る者の少なきを爪上の土に比し、法滅盡經には一二の小石に喩へたまひぬ。之に由つて考量するに、恐らくは千年五百年にも、一人の正師は得難かるべし。今日の如き謬亂せる佛法を以てしては、世間の罪に依つて惡道に墮つるよりは、謗法の罪に依つて墮つる者遂に多くして十方の土の如くならんか、されば誤れる佛法に依りて俗人よりは僧侶、女人よりは尼僧多く惡道に墮つべしと。この結句眞に戒心すべき所なり、而して現今日本の佛教界は復更にこれよりも甚し、眞に長嘆すべきなり。この感激の大

精神は發して次に擧ぐる聖人の發願と爲つて現はれしなり。

犢子、方廣は外道の二人の名なり、大智度論卷一に出づ、又天台の止觀十に云く、附佛法の外道とは犢子方廣より起る、自ら聰明なるを以て佛の經書を讀んで、一見を生ず、佛法に附いて起るが故にこの名あり。犢子は舍利弗の毘曇を讀んで、自ら別の義を制して言く、我は是れ四句の外の第五不可思議藏中なりと、云何が四句なる、外道は色即是我、離色有我、色中有我、我中有色と計す、四陰も亦是の如し、合して二十の身見あり、大論に云ふ、二十の身見を破して須陀洹を成ずとは、即ち此の義也。今の犢子は我を計すること六師に異なり、復佛法にあらず、諸論皆推いて受けず、便ち是れ附佛法の邪人の法也と。又方廣の道人は自ら聰明なるを以て、佛の十喩を讀み、自ら義を作つて云く、不生不滅、如幻如化、空幻を宗と爲すと。龍樹斥けて云く、方廣が所作は亦是れ邪人の法也と。又五教章に云く、小乗の中の犢子部は五の法藏を立つ、一は過去、二は未來、三は現在、四は無爲、五は不可說なり、この我は是れ有爲なりとも無爲なりとも説くべからざるが故なりと。無垢論師は西域記四に出づ、迦濕彌羅國の人なり、說一切有部に於て出家し、博く

衆賢論師の率都婆に次り、打つて嘆じて曰く、惟みれば論師雅量清高にして大乘を抑揚し、方に異部を挫いて本宗の義を立てんと欲す、如何ぞ年を降すこと永からざる、我れ無垢友末學に承け、時を累ぬれども義を慕ひ、曠代に徳を懷へり、世親没すと雖も宗學尙ほ傳はる、我れ所知を盡して當に諸論を製し、瞻部洲の諸の學人等をして、大乘の稱を絶ちて世親の名を滅せしめん、斯の不朽の爲めに用て宿心を盡さんと。是の語を説き、已つて心に狂亂を發し、五舌重なり出て熱血流れ、痛く命必ず終らんと知つて言を裁して曰く、夫れ大乘教は佛法の中の究竟の説なり、名味混絶し理致幽玄なり、輕しく愚昧を以て駁慢す、先達を斥くるの業報、然たり、身を滅すも宜べなるかな、敢て學人に告ぐ、厥の鑿斯に在り、各爾の志を慎んで疑を懷くを得ること無れ、大地震を爲し、命途に終はる。衆賢論師とは娑婆論を究むる小乗の人なり。

摩沓婆は外道の人なり、西域記八に出づ、僧法の法を祖とし、學内外を窮め、名前烈よりも高し、誠に博達の人なり。時に南印度の徳惠菩薩幼にして敏達なり、學三

藏に達し、理四諦を窮む、摩沓婆の論幽微を極むると聞いて、鋭を挫かんと懷ひ一りの門人に命じ、書を裁して謂つて曰く、敬問す、摩沓婆善く安樂なりや、宜しく勞弊を忘れて舊學を精習すべし、三年の後、汝が嘉聲を挫かんと、是の如く、第一年、第二年、第三年の中に、毎に使を發して報じ、將に迹を發せんとするに及んで、重ねて書を裁して曰く、年期已に極まれり、學業何如ん、吾れ今至らん、汝宜しく之を知るべしと、摩沓婆甚だ惶懼を懷き、諸の門人及び邑戸を誡めて、今よりの後沙門異道を居止することを得ざれ、遞ひに相宣告犯違あること勿れと。時に徳惠菩薩錫を杖にして、摩沓婆が邑に來至す、邑人約を守つて相舍すること有る、莫し諸の婆羅門更に之を罵つて曰く、斷髮殊服何を異人なるや、宜しく時に速に去るべし、此に止まること勿れと。徳惠菩薩異道を摧かんと欲す、冀くは其の邑に宿らんと、因つて慈心を以て辭を卑ふして謝して曰く、爾曹は世諦の淨行なり、我れ又勝義諦の淨行なり、淨行既に同じ、何爲ぞ拒むやと。婆羅門因つて與に言いはず、但だ驅逐を事として、邑外に出だす。(乃至)是に於て遂に行ひて王宮に至り、門者に謂つて曰く、今沙門あり、遠くより至れり、願くは王摩沓婆と論ぜんことを垂許せ

られよと。王聞いて驚いて曰く、此れ妄人ならんのみと、即ち使臣に命じて摩沓婆の所に往いて王の言を宣べしめて曰く、異の沙門あり來りて談論せんことを求む、今己に論場を瑩麗し近遠に宣告して來儀を佇望す、願くは降趾を垂れよと。摩沓婆王の使に問ふて曰く、豈南印度の徳惠論師にあらざるか。曰く然り。摩沓婆聞いて心に甚だ悦びざるも、事辭して免がれ難し、遂に論場に至る。國王大臣士庶豪名咸く皆集會して高談を聽かんと欲す。徳惠先づ宗義を立す、景落到泊んで摩沓婆辭するに年の衰へたるを以てす、智達對に惜し、請ふ歸りて靜思し方に來難に酬ひんと、事毎に歸らんと言ひ、且たに座に升るに及んでも、覺いに異論なし、第六日に至り血を吐いて死す、其の將に終らんとするや、願みて妻に命じて曰く、爾ち高才あり耻かしめられしを忘るゝ無れと。摩沓婆死するも匿くして喪を發せず、更に鮮綺を服して論會に來至す。衆咸く誼譁して更に相謂つて曰く、摩沓婆は才の高きを自負し徳惠に對するを耻づるならん、故に婦を遣はし來る、優劣明かなりと。徳惠菩薩其の妻に謂つて曰く、能く汝を制せし者をば、我れは已に之を制せりと。摩沓婆が妻難を知つて退く。王曰く、何ぞ言の密なる、

彼れ便ち默然たる。徳惠曰く、惜ひ哉、摩沓婆は死したり、其妻來りて我と論ぜん
と欲するのみと。王曰く、何を以て之を知る、願くば指告を垂れよと。徳惠曰く、
其の妻の來たるや面に死喪の色あり、言に哀悲の聲を含む、故を以て之を知る、摩
沓婆死せりと、能く汝を制せし者とは其の夫を謂ひしなりと。王使に命じて往
いて觀せしむれば、果して所議の如かりしと。王乃ち謝して曰く、佛法の玄妙な
る英賢軌を繼ぐと。

此に日蓮案じて曰く、世すでに末代に入つて二百餘年、邊土に生
をうけ、其の上下賤、其の上貧道の身なり、輪回六趣の間には人天
の大王と生れて萬民をなびかす事、大風の小木の枝を吹くが如
くせし時も佛にならず、大小乘經の外凡ゴザン内凡の大菩薩を修しあ
がり、一劫二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入り
ぬべかりし時も、強盛の惡縁におとされて佛にもならず、知らず
大通結縁の第三類の在世を漏れたるか、久遠五百の退轉して今

に來たるか、法華經を行ぜしほごに、世間の惡縁、王難、外道の難、小乘經の難なんごは、忍びしほごに、權大乘實大乘經を極めたるやうなる、道綽、善導、法然等が如くなる惡魔の身に入りたる者、法華經をつよくほめあげ、機をあながちに下し、理深解微と立て、未有一人得者千中無一等と、すかしゝものに、無量生が間恒河沙の度すかされて、權經に墮ちぬ、權經より小乘經に墮ちぬ、外道外典に墮ちぬ、結句は惡道に墮ちけりと、深く此をしれり、日本國に此をしれる者は、唯だ日蓮一人なり、これを一言も申し出すならば、父母、兄弟、師匠、國主の王難必ず來るべし、いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此の二邊を合せ見るに、いはずば今生は事なくとも、後生は必ず無間地獄に墮つべし、いふならば三障四魔必ず競ひ起るべしと知りぬ、二邊の中にはいふべ

し。王難等出來の時に退轉すべくば、一度に思ひ止むべしと、且くやすらいし程に寶塔品の六難九易これなり、我等程の小力の者須彌山はなくとも、我等程の無通の者乾草を負ふて劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒沙の經々をばよみをぼうとも、法華經は一句一偈も末代に持ち難しと説かるゝは是れなるべし、今度盛強の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。

六聖人の發願及び統一の大權を明す

一 聖人の發願を示す

これより己下は、日蓮聖人は佛教の紛亂を慨いて、佛教革正の運動を起し、遂に統一の目的を果さんとするを明すものにして、この處は先づその發願を示す。日蓮靜かに思ふやう、今や世は末代に入つて既に二百餘年地は佛の生處を去るゝと遙遠なり、而も我身は下賤より出て、且つ沙門貧道の者なり、道徳の寡少なるを貧道と稱す、身に寸鐵を帯びず、手に何等の權力を有せず、真に一箇孤立の沙門な

り。回顧すれば生々世々の間には時に人天の大王と生れて、權威四方を壓せしこともあらん、されど菩薩の行願を立つるなくして、佛果を成せず、又大小乗經を修して、外凡内凡の位に登り、菩薩と成りしこともあり、永劫徳を累ねて將に不退位に昇入すべかりし時も、強烈なる誘惑防害に遭ふて、菩提を成就し得ざりしか、或は大通如來に結縁せしものにして、即座に得脱せし者、中間に得脱せし者、今回釋尊に遭ふて得脱せし者あるが、この第三類の在世の得脱に漏れたる罪業深き一人なるか、更に久遠五百塵點劫の時本佛の教化を受けし者の、退轉して長劫流轉を辿りて、今に尙ほ開悟し得ざる、大顛倒者中に屬せる者なるか。更に一考すれば、恐らくは曾て法華經を行ぜしことのありしも、世間の惡縁、王難、外道の難、小乗經の難等は耐へ得てありしも、權實の大乗を極め盡せしやうなる、道綽等の如き人師に惑はされて、權經方便に墮ち行きしか、彼等は法華經を敬遠して法は尊とけれども、機堪へずと稱し、機法の關係に詭辯を弄する者に欺かれて、一步を誤まりしが、一步は千里の差を生じて、權經に墮ちまた小乘に墮ち、次第に墮ち行きて、外道、外典より遂に惡道にまで墮ちたりけるならん、この事を深く知りて

戰慄せり。然るにこの一步千里の差を生じて、權實の分界を辨へざるが爲めに、結局邪道に馳せて永劫沈淪の苦を受くる所以を、深刻に自覺せる者、日本國中に但だ日蓮一人なり、この類似の思想を以て眞正の道を誤まるの一事、是れ全く明教を念とし、教化に志す者の、恐懼戒心すべき所なり。今若しこの機微を告白せば、父母よりも兄弟よりも、師匠よりも、反對迫害を與へられ、更に國主の王難即ち權力者よりの壓迫も來たるべし、されど之を恐れて言はずんば、慈悲に於て缺くるの所行なり、之を如何せば可なる、之を如何せば可なると、沈思默考するに、法華涅槃の遺訓の示す所は、退いて之を默過せば、今生は事無きを得るも、後生は必ず最重の地獄に墮つべし、進んで之を唱道せば、三障四魔必ず紛然として競起し、迫害に次ぐに迫害を以てし、諸種の法難續發すべし、されど如何に迫害來り、法難起るも、一切の艱難を覺悟して、斷々乎之を絶叫せずんば、何となれば、佛陀の本旨地に墮ち衆生は沈淪し、國家は衰滅に歸せん、一身の安を偷んで默すべきにあらず、若し夫れ王難等出來の時に臨みて、未練にも退轉するが如くんば、寧ろ初めより唱道せざるに若かずと。こゝに一般の決意定まりて、心少しく休まりし

が續いて胸間に浮び來たるは、寶塔品に説かれし六難九易の遺訓なり。六難とは法華經の義を問ひ、法華經を持ち、法華經を説く等の事にして、九易とは須彌山を擲ち、乾草を負ふて大火に投ずる等の事なり。要するに法華の信受護法は大なる難事にして、他の如何なる困難にも超過すとの警告を六難九易と云ふ之を思ふに、末代今日に於て法華の正義を貫くは、實に是れ艱難中の艱難、辛勞中の辛勞ならん。されど日蓮は覺悟しぬ、「今度強盛の菩提心を起して退轉せじ」と、この發心、この立願、縦しや頭首は刑場に斷たるとも、縦しや肌は佐渡寒風に凍ゆとも、退せじ轉ぜじ、微動だも受けじ、曾て聞く世尊は成道の前不動三昧に入りたましとかや、日蓮佛教を蒙りて出てし身のいかてかこの金剛鐵石の發願を破らるべきと。後の法難續起する毎に、「本より存知の旨也」の一語を以て、泰然として之に向はれしは、全くこの決定覺悟の力より來りしなり、日蓮聖人より學ぶべき事固より二三に止らず、而かもこの決心覺悟の雄々さは、正義の軍に従ふ者の一齊に學ぶべき所ならんか。

理、深、解、微、とは、法華經の理は深けれども、我等の機限は下劣なれば、之を解領する

こと、微、少、にして、結局機法不相應なれば、機を前提に置いて、法華經を排斥せし語なり。未、有、一、人、得、者、とは、法華經の如き深法を修するも、未だ一人の得る者あらずと斷じて、法華經を貶斥するの語なり。千、中、無、一、とは、法華經を修する者千人ありとも、一人の得るものあるなしと云ふものにして、極力法華を厭嫌せしめんとする誹謗の言なり。道、綽、の、傳、は、續、高、僧、傳、二十に、善、導、の、傳、は、同、書、二十七に、法、然、の、傳、は、元、亨、釋、書、五に出づ。三、障、四、魔、とは、煩、惱、障、業、障、報、障、を、三、障、と、云、ひ、蘊、魔、煩、惱、魔、死、魔、天、魔、を、四、魔、と、云、ふ。三、障、に、關、して、は、涅槃經に下の如く説けり。

諸の衆生、惑業に障蔽せられて、正道を見ず、善心を生起すること能はず、故に障と名く。煩惱障とは昏煩の法心神を惱亂す故に煩惱と名く、謂く貪欲、瞋恚、愚痴等の正道を障蔽する、是れを煩惱障と名け。業障とは貪瞋痴より重惡の業を造り、正道を障蔽す、是を業障と名け。報障とは生報の障蔽に依りて正道を障蔽す、是れを報障と名くと。

四魔に就ては地論に出づ、魔とは梵語具さには魔羅と云ふ、善根を殺害するの義なり。煩惱魔とは妄惑正心を惱まし、正道を成ぜざらしむ。蘊魔とは五蘊生死

の苦果を成じて正智の命を奪ふ。死魔とは四大分散し天喪の爲に慧命を續ぐ能はず。天魔とは第六天の魔王及び眷屬の正善を妨ぐるを云ふ。

既に二十餘年が間此の法門を申すに、日日月月年年に難かさなる、少々の難はかずしらず、大事の難四度なり、二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ、今度はすでに我が身命に及ぶ。其の上弟子といひ檀那といひ、わづかの聽聞の俗人なんご、來つて重科に行はる、謀反なんごの者のごとし。

二 法難の競起するを擧ぐ

この處は、果して諸種の法難續出し、自己には大難四度に及び、弟子檀那並に聽聞の衆をも、重科に行はれしを擧ぐ。前段に鞏固なる決心を述べしが、果して二十餘年間に續發せし法難は、小難枚擧に勝へず、大難已に四度なり、即ち松葉ヶ谷の夜打、伊東の遠流、小松原の刀杖、龍口の首の座より續いて佐渡の誦居これなり、この中に夜打と刀杖とは且らく置く、伊東と佐渡の遠流は、王難と稱すべし、王難と

は政權を有する者が、その權力を以て迫害する事にして、遁れんとするも遁る能はざるなり、而も今回佐渡の誦流は表に遠島と云ふも、その實は生けて還へさじとの底意に出づ、縦しや千尋の海底に沈める大石は浮ぶとも、日蓮は生けて鎌倉へ還へさじとなり、故に、今度はすでに我が身命に及ぶと書したまふ、この御書を贈られし門弟檀越は、之を拜して當時如何の感をか懐ける加之弟子は土の牢に投ぜられ、檀越は所領を沒收せられ、僅かに説法の會座に詣てしとて、捕へ來つて重科に行はる、而もその殘虐非道の狀は、謀叛を企てし者を處罰するが如しと。今にして當時の景狀を想見する尙ほ戰慄を覺ふ、聖人並に先賢は斯くの如くにして、我等の爲にこの正法を建設したまへり、思ふてこゝに至らば、感憤何ぞ禁ぜん、報恩の淨行、唯だ一途あり、聖人の志願を奉持して、その發揮に向つて、渾身の努力を惜まざること、是れなり。

法華經第四に云く、而も此經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況や滅度の後をや等と云々。第二に云く、經を讀誦し書持するこ

とあらん者を見て、輕賤憎嫉して、而も結恨を懷かん等と云々。
第五に云く、一切世間に怨多くして信じ難し等と云々。又云く、
諸の無智の人惡口罵詈することあらん等と云々。又云く、國王
大臣婆羅門居士に向つて、誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の
人なりと謂はんと。又云く、數々擯出せられん等と云々。又云
く、杖木瓦石もて之を打擲せん等と云々。涅槃經に云く、爾の時
に多く無量の外道あり、和合して共に摩訶陀王阿闍世の所に往
く、今は一の大惡人あり瞿曇沙門なり、一切世間の惡人利益の爲
の故に、其の所に往集して而も眷屬と爲り、善を修すること能は
ず、呪術力の故に迦棄舍利弗目犍連を調伏す等と云々。天台云
く、何に況や未來をや、理化し難きに在り等と云々。妙樂云く、障
未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く

等と云々。南三北七の十師、漢土無量の學者、天台を怨敵とす。
得一曰く拙ツボク哉智公汝は是れ誰の弟子ぞ、三寸に足らざる舌根
を以て、而も覆面舌の所説を謗するや等と云々。東春曰く、在世
の時、許多の怨嫉あり、佛滅度の後此經を説かん時、何が故ぞ亦留
難多きや。答へて曰く、俗に良藥口に苦ニガしと言ふが如く、此經は
五乗の異執を廢して一極の立宗を立つ、故に凡を斥け聖を呵し
大を排ひ小を破り、天魔を銘して毒蟲と爲し、外道を説いて惡鬼
と爲し、執小を貶して貧賤と爲し、菩薩を挫いて新學と爲す、故に
天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆ひ、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す、
此の如きの徒悉く留難を爲す、多怨嫉の言豈唐ナカしからんや等と
云々。顯戒論に曰く、僧統奏して曰く、西夏に鬼辦婆羅門あり、東
土に巧言を吐く、禿頭の沙門あり、此れ乃ち物類冥召して世間を

誑惑す等と云々。論じて曰く、昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る、實なる哉法華に何況といふことや等と云々秀句に曰く、代を語れば則ち像の終り末の初め、地を尋ねれば則ち唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時なり、經に曰く、猶多怨嫉況滅度後と、此の言良に以ある也等と云々夫れ小兒に灸治を加ふれば必ず母をあだむ、重病の者に良薬をあたられば定んで口に苦しとうれう、在世猶ほしかり、乃至像末邊土をや、山に山をかされ、波に波をたみ、難に難を加へ、非に非をますべし。

三 法華の證文及び先例を擧ぐ

この處は、法華行者に來たる法華の經證と天台妙樂の之に關する所見と天台の受けし反對と、智度法師傳教大師の見解を列擧し、最後に法華の來たる所以の自説を示せり。法華經法師品の況滅度後の文譬喻品の輕賤憎嫉の文勸持品の三

類蜂起の文涅槃經の世尊に對する外道の迫害の文、この經證を列擧し、次に天台が文句に述べたる見解と、妙樂が文句記に釋せる見解とを擧ぐ、文句の意は佛在世すら法華經の爲の故に障礙紛起せり、何に況や未來即ち滅後に於てをや、この法華に反對の起る理由は、最上の妙教なれば教化することの難きなりと。記の意は業障の除かれざる衆生を怨と云ひ、法華の正法を聽聞することを喜ばざる者を嫉と名くるなり。この聞くを喜ばざるを嫉と名くの一句は、深刻なる觀察にして、宣敷に従事するもの、實驗する所なり。次に天台の法華を宣揚するに當りて、南三北七の十師之を怨みたりしが、我が國に於ても得一と云へる法相の學者は、極力之を誹謗せり、得一の傳は元亨釋書四に出づ、彼は法相宗を修圓に學び、自ら新疏を作つて傳教大師に反抗せり、彼は沙門の奢侈を惡み、飧食弊衣にして恬然たりしと云ふ、得一は徳一を正とす。咄ひ哉智公云云は、傳教大師守護章の上の上に引用せり、智者大師は何の道統ありて、三寸に足らざる舌を以て、覆面舌即ち如來の教を誹謗するやと、この所説と云へるものは、解深密經に立てたる三時の教判を指す。傳教之を破して云く、大師滅度の開皇十七年丁巳より、解深

密經を譯せし大唐貞觀二十一年丁未に至るまで、己に五十一歳を経たり彼の陳隋の代には解深密經未だ翻譯せられず、三時の文都べて所據なし、教なく人なきに、誰の三時をか謗らんと。彼の宗に立つる三時教とは解深密經に依つて立つと云ふ、初時教とは四阿含經なり、二時教とは空を説き、隱密に無自性を説く諸經なり、三時教とは中道を説く華嚴深密等の經なりと。傳教の守護章開卷第一にこの三時の判教を痛撃せり、篤學の士は往見せよ。

東春とは智度法師所住の地名なり、書名は法華義讚と云ふ。法難の起因を説いて良藥の口に苦きに比し、而してその苦き所以を明すこと詳密なり、法華は五乘即ち人乘、天乘、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の差別的執見を打破して、一乘極妙の玄宗を立て、凡聖大小を歷破す、譬喻品には天魔を毒虫に、外道を惡鬼に比し、信解品には小乗の人を窮兒に喩へて涌出品には菩薩を新發意と稱す、故に或は惡み或は逆らひ、或は驚き或は怯る、而してこの輩法華行者に對して留難を爲す、故に經に怨嫉多しと説くは、決して虚しからずと。題戒論は傳教大師の六宗を彈責せし書なり。僧統とは官名なり、厨賓の沙門師賢魏帝に歸依を得時に僧統に任ぜらる、

これこの官名の初なり。西、夏、に、鬼、辨、婆、羅、門、あり、とは西夏は天竺を指す、西域記八に云く、波吒釐城中に婆羅門あり、字を荒叢に背いて世路に交らず、鬼を祠つて福を求め、魍魎相依り、高論劇談して雅辭響應す、人或は激難すれば帷を垂れ己つて對ふ、舊學高才其の右に出づる無し、士庶翕然として之を仰ぐこと、猶ほ聖のごとし、時に阿濕縛窣沙馬鳴と譯す、菩薩あり、吾れ今彼に往いて其の舉措を觀んと、遂に其の慮に行き、之に謂つて曰く、幸に願くは帷を褰げて敢て宿志を伸べんと。而るに婆羅門は居然として簡傲に帷を垂れて以て對へ、終ひに面談せず。馬鳴心に知んぬ、鬼魅の情の甚しきことを、退き王に往いて白す、唯だ願くは許を垂れよ、我れ居士と較論し劇談せんと。王聞いて駭いて曰く、是れ何人ぞや、若し三明を證し六通を具せずんば、何ぞよく彼と論ぜんやと。駕を命じ躬ら臨んで詳に辯論を監す、是の時に馬鳴三藏の微言を論じ、五明の大義を述べ、妙辯縱横にして高論清遠なり。而して婆羅門辭を述べること己はる。馬鳴重ねて曰く、吾が旨を失へり、宜しく量ねて之を述べしと。時に婆羅門默然として口を杜づ。馬鳴叱して曰く、何ぞ難を釋かざる、事ふる所の鬼魅に宜しく速に辭を授かるべ

し、疾く其の帷を褰げて其の怪を視占へと。婆羅門惶れ遽て、曰く、止みなん止みなんと。馬鳴退いて言つて曰く、此子今晨聲聞を失ひ、遂に虚名は久しきにあらずとは斯の謂かと。王曰く、夫の盛徳にあらずんば誰か左道を鑑がみん、知人の哲なり、絶後光前國に帝典あり、宜しく茂實を旌すべしと。
 東土に巧言を吐く、禿頭の沙門あり、此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑すとは、南都六宗の徒より傳教を誹謗するの語なり。こゝに於て傳教は之に對して論駁して曰く、昔齊朝に光統と云へる師敵對の僧あり、慢心の爲に毒害せる惡人なり、今は我國に六種の光統に同じき者あるを見る、これは南都六宗を指すなり、之に由つて法華經に何に況や滅度の後をやと説いて、法華行者に反對の起るべきを讒言せらしは、今全く適中せること覺ふとなり。光統の事は補註三に佛馱三藏の學士光統惠光法師、姓は揚定州の人なりと云へり。傳燈錄三に云く、魏氏釋を奉じて禪雋林の如し、光統律師流支三藏は、乃ち僧中の鸞鳳なり、師の道を演るに相を斥けて心を指すを賂て、毎に師と論議するに是非蜂のごとくに起る、師は退に玄風を振ひ普く法雨を施す、而るに偏局の量自ら堪任せず、競ふて害心を起し

數毒藥を加ふ第六教に至り化緣已に畢はり傳法人を得るを以て、遂に復之を救はず、端居して逝きぬ、即ち後魏孝明帝太和十九年丙辰歲十月五日也と。次に傳教秀句の文を擧げ、況滅度後の實證を明かにし。次に聖人の自解を加ふ。矣治と良藥とに喩へて、法華の教化に反抗する所以を辨じ、時移り地異なり、佛敎の紛争愈盛んなれば、法華行者に法難の競起するは、免がれ難きことなるを示す。
 像法の中には天台一人法華經一切經を讀めり、南北これをあだみしかども、陳隋二代の聖主眼前に是非を明らめしかば、敵ついに盡きぬ。像法の末に傳教一人法華經一切經を佛説のごとく讀み給へり、南都七大寺峰起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我れと明らめ給ひしかば、又事なし。

四 賢王の正師に従ひしを示す

この處は天台傳教の正師世に出てし時、何れも反對盛んなりしも、賢王明主ありて之を鑑別し給ひしを擧げ、今も亦斯くあるべきを示す。佛滅後正法千年過ぎ

去りて、像法千年の中頃に、漢土に天台智者大師出て、法華經の本旨一切教の實歸を教の如くに讀破したまへり、時に南三北七の十流之に反對を唱へしも、幸に陳隋二代の君主はその正邪を識別したまひしを以て、天台の釋教大いに漢土に弘まれり。又像法の末期に及んで、我朝に傳教大師出て、法華經の正義一切經の眞意を讀破したまへり、時に南都六宗七大寺の諸僧驕然として反抗を試みしも、桓武・嵯峨の賢主親しくその當否を鑑別し給ひしかば、遂に六宗は我慢の儘を倒して法華に歸伏し終れり。この二大事蹟は實に佛教史上の偉觀なり、今も亦佛教統一の爲には賢君明主のありて邪正を判別し、法清く國靖らかなる聖世を實現せんことを切望すと成り。

七、大寺とは、東大寺、聖武帝神龜五年に之を建つ、興福寺、不比等、和銅三年に之を建つ、山階寺とも稱す、元興寺、推古天皇崇峻天皇之を建つ、飛鳥寺とも稱す、大安寺、皇極帝元年蘇我氏之を建つ、百濟寺とも稱す、藥師寺、天智帝元年之を建つ、西大寺、高野天皇の天平勝寶元年に工を起し、十七年を要して天平神護元年に之を畢る、法隆寺、聖德太子之を建つ、伊香留香寺とも稱す。

今は末法の始め二百餘年なり、況滅度後のしるしに、鬪諍の序となるべきゆへに、非理を前として、濁世のしるしに召し合せられずして、流罪乃至壽にもをよばんとするなり。

五 今の世の濁亂を擧ぐ

この處は今時末法の常態にや、非理を採つて正義を斥け、公場の對決は望むに由なく、却て法難を得て流罪死罪に及ばんとするを慨嘆す。今時は末法に入つて二百餘年況滅度後の金言我を欺かず、鬪諍堅固の端を開くにや、上下萬民非理に與みし、濁惡の悲しさには、公場の對決は期すべくもなく、曲直を問はずして法華正法の行者を迫害し、流罪死罪の極刑を以て擬するに至る。一身の艱苦は縦し之を忍ぶとも、立正安國の素願何れの日にか之を達せん、本佛遣付の大事何を以てか之に酬むん、我が扶桑日本の天職誰か復之を光揚せん、一切衆生の醫眼誰に由つてか開かるるを得ん、法は亂れ國は衰へ人は沈淪の苦に入らん、悲んども尙ほ餘りあり、慨いても亦足らず、之を如何にせば可なる、之を如何にせば可なる、聖

人の心胸熱し來つて熾の如し。

三三三

されば日蓮が智解は天台傳教には千萬が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲すぐれたることは、をそれをもいだきぬべし。

大 慈悲もて萬難を突破するを明す

この處は法難競起する毎に慈愍濟度の行願愈堅きを示し、以て法華行者の本領を發揮す。斯かる非理無道の世なれば、正義を以て立つ者は、智解のみに甘んずべからず、健闘の力波羅密と慈悲の願波羅密なかるべからず、故に日蓮が法華經に關する冷靜なる智解は、或は天台傳教には千萬が一分も及ばざるべきも、健闘の精神を以て難を忍び、行願を立て、慈悲を行ふの點に於て、恐らくは彼等先聖も日蓮に譲る所あるべしと、この壓迫に處し艱難を経て、その精神毫も偏僻に陥ることなく、又隱忍冷酷に流れずして、而も却て堂々たる健闘忍耐の徳を養ひ、慈愍濟度の心を高むるに於て、こゝに聖人の眞乎偉大なるを見るべく、凡庸の輩

の遠く及ばざるはこの點に在り。聖人の法華經觀の智解は、前に既に述べしが如く、報應顯本の妙旨を光揚して、天台傳教未發の境地を開拓せり、猶ほ一念三千の法門をよりす、きたてて、閻浮第一の本尊を光顯するに至れり、又我が日本國の天職を自覺して、立正安國の大義を絶叫し、又天晴地明を説いて、一切の教義を日常實生活の上に運用したるが如き、數へ來らば、聖人が先人に卓越せる知見を、幾何なるかを知らず、或は實生活の上に、或は道德觀の上に、或は宗教觀の上に、或は哲學論の上に、幾多の特長を發揮す、而も今は謙して、智解は千萬が一分も及ばずと云ふ、若し文上を速断して、聖人の長所は、慈愍行願の上のみ存すと謂はゞ、その痴愚寔に感笑すべきなり。曾ては天台宗の高僧某日蓮聖人のこの文を讀んで、景仰讚歎措かざりしと云ふ、是れその人の卓見なりしなり。今にして尙ほ且つ聖人を貶せんとするが如きは、若し妄執の失にあらずんば、是れ頑愚不明の徒のみ、今後は社會的批判に於て、聖人の眞價は、識別せらるべきなり。

定んで天の御計らひにもあづかるべしと存ずれども、一分のし

三三三

るしもなし、いよいよ重科に沈む。還つて此事を計りみれば、我身の法華經の行者にあらざるか、又諸天善神等の此國をすて、去り給へるか、かたがた疑はし。

七 疑問を設く

この處は、日蓮法華經の爲に難を忍び慈悲の行願を起せるに、佛天の加護なきかの如くなるは、我身法華經の行者にあらざるかと論じ、疑を設けて答を得んとするなり。日蓮の志に對しては、定んで天の加護もあるべきに、未だその驗しなし。却て重科に行はる之を以て思ふに、我身に缺くる所ありて、自ら法華行者を以て任ずるも、その實法華行者にはあらずして、邪義に陥れるか如何。若し又我身は眞の行者なるも、諸天等此國の非理無道を憤り捨てて去りたまふが故に、行者を擁護するなきかと。聖人が自己の感應の實驗は既に龍口の刑場に顯はれ、今亦如何に惡みて、千尋の底の石は海に浮ぶとも、日蓮は生還せしめずと云ふとも、必ず生きて鎌倉に歸るべしと、佛天の加護を確信せり、然れども凡人は淺薄なる見

解を以て之を疑ふが故に、今は且らく之に與同してこの説をなすのみ、而してこの疑問は却て確實に自己が法華行者たることを證明せんとするにあり、故にこの疑問の如きは凡人の惑を解くの意に外ならず。

而るに法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生れずば、殆んど世尊は大妄語の人、八十萬億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし。經に曰く、諸の無智の人、惡口罵詈等し、刀杖瓦石を加ふ等と云々。今の世を見るに日蓮よりの外の諸僧、誰の人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある、日蓮なくばこの一偈の未來記は妄語となりぬべし。惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲なりと。又曰く、白衣の與めに法を説いて世のために恭敬せらるゝこと、六通の羅漢の如くならんと。此等の經文は、今の世の念佛者禪

宗律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。常に大衆の中に在りて乃至國王大臣婆羅門居士に向ふ等と。今の世の僧等日蓮を讒奏して流罪せずば、此の經文むなし。又曰く、數々擯出せられん等と云々。日蓮法華經の故に度々流されずば、數々の二字いかんがせん、此の二字は天台傳教も未だ讀みたまはず、況や餘人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆゑに唯だ日蓮一人これを讀めり。

八 聖人は色讀の行者なるを明す
此の處は勸持品二十行の偈に説かれたる如來の讒言を、日蓮悉く身に讀めるを證し以て上行の再身を疑ふの餘地なきを示さんとす。前段にいよいよ重科に行はるゝに就て、日蓮法華の行者にあらざるかを疑ひしも、この法難は却て日蓮が法華行者なることを反證するなり。何んとなれば若し日蓮を斥けなば、勸持品二十行の偈に示せる讒言をば之を如何にすべし、日蓮若し此國に生れてこの

迫害に遭ふことなかりせば、殆んど世尊は大妄語の人となりたまひ、勸持品の時發誓せし多くの菩薩も虚言の責を脱がれ難し。見よ經文には三類の敵人を明し先づ俗衆慢心の徒としては、諸の無智の人あつて惡口罵詈等し、刀杖瓦石を加ふ等と説けり、今の世を見るに日蓮より外の諸僧誰か法華經の爲にこの迫害を蒙むれる者ありや、若し日蓮なくば、この一偈の預言は水泡に歸しぬべし。又經に道門慢心の者と僭聖慢心の徒とを擧げ、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲なり。又白衣の與めに乃至羅漢の如くならんと説く前者は道門後者は僭聖なり、若し今の世に諸宗の法師並に良觀等ありて、法華行者に對し隱忍なる手段と偽善的方法とを以て反對せずんば、世尊は妄語の人となりたまふべし、幸にこれ等三類の敵人悉く現はれて世尊の金言を實にせり。又經文には國王等に向つて讒言することを説けるが、彼等が鎌倉幕府に讒奏して日蓮を流罪死罪に處せずんば、この經文も虚偽となりぬべし、幸にして彼等は讒言を爲してこの經文を事證せり。又特に注意すべきは數々擯出の經文なり、若し日蓮法華經の故に度流されずば、この二字を如何にせん、この二字は先聖天台傳教も未だ身讀した

まはず況や餘他の凡僧をや然るに末法の始にこの經の行者出づべしとの讖言に酬へ恐怖惡世中の金言に應じ、この迫害多難の世に但だ日蓮一人この讖言を色讀せり、光榮何にか例へん之に由つて佛語を實にし、本師釋尊の御化導の萬一を資けまいらせぬれば喜び何を以てか比せん、身は今や雪中塚原の庵室に在りて餓えと寒さに閉ぢらるるも、微少なる一身寡徳貧道の己れの、この願行を全うするを得たるは衷心の欣悅唯だ獨り佛のみ照覽したまひぬべしと。この法難は他面に我身法華の行者たるを證し、法華行者は上行の再身にして、上行菩薩は佛敎統一の節刀を付託せられしを證し、ここに宿昔の行願を成就すべしと、法悅禁ずるなかりしなり。

例せば世尊付法藏經に記して曰く、我が滅後一百年に阿育大王といふ王あるべし。摩耶經に曰く、我が滅後六百年に龍樹菩薩といふ人南天竺に出づべし。大悲經に曰く、我が滅後六十年に末田地トクノチといふ者、地を龍宮につぐべしと。これ等は皆佛記のご

とくなりき。しからずば誰が佛敎を信受すべき、而るに佛恐怖惡世、然後末世、末法滅時、後五百歳なんど、正妙二本に正しく時を定めたまへり、當世法華の三類の強敵なくば、誰が佛説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として、佛語をたすけん。南三北七七大寺等猶ほ法華經の敵の内なり、何に況や當世の禪律念佛者等は脱るべしや、經文に我身普合せり。

九 佛記の不安を擧げて色讀の行者を證す

この處は法華經の行者出現の時機に關し、佛記の不安を證し、以て聖人の一身經文に契合せるを明し、以て法華經の行者たるを確證す。佛は付法藏經等の諸經に、阿育大王等の出現の時を懸記したまひしに、皆悉く符合せり。而して法華經には法華行者出現の時を明記し、今正しくその時なり。時と云ひ前の三類の敵人と云ひ皆悉く具備せり、日蓮を除いては誰人をか法華の行者として佛語を實證し得べき。三類の敵人に關しては天台に對する南三北七傳敎に對する南都

七次寺の如き誹謗反對の輕かりし者すら法華の敵人として認められたり況してや當時の禪律念佛者等の如き惡罵讒謗到らざるなきの徒豈に脱るべしや之に由つて考ふるに時と之ひ敵人と云ひ、一一日蓮の身に合す復何ぞ天の加護なきを思うて日蓮の法華行者たるを疑ふべけんや。

付法藏經の文は卷三に出づ、又阿育王傳一に佛言はく我れ若し涅槃せば百年の後に此の小兒は當に轉輪聖王と作つて四分の一に王たるべしと。摩耶經の文は下卷に出づ七百歳已つて一比丘あり名けて龍樹と曰はん善く法要を説き邪見の幢を滅して正法の燈を燃さん。大悲經の文は卷二正法品に出づ。六十年の語なし我が滅後に當に比丘あるべし末田提と名く三明六通あつて八解脱を具す北天竺國の罽賓川の中に當に無量の諸龍夜叉乾闥婆等あるべし大身力を具し彼の川に依住す。是の末田提比丘彼の處に到り之を降して敬信を得せしめ已つて人をして彼の罽賓川に住せしむ。正妙二本とは法護三藏の譯せし正法華經と羅什三藏の譯せし妙法華經とを云ふ。

御勸氣を蒙むれば、いよ／＼悦をますべし、例せば小乗の菩薩の

未斷惑なるが、願兼於業と申して造りたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮ちて大苦を受くるを見て、かたの如く其の業を造つて願つて地獄に墮ちて、苦みに同じ苦みに代はるを悦びとするが如し。此も又くかの如し、當時の責はたうべくもなければ、ごも未來の惡道を脱すらんとをもえば悦びなり。

一〇 法難を以て法悦と爲すを示す

この處は、法難に遭ふを却て悦ぶ所以を説き、一は衆生の苦に代つて之を救はんと欲し、一は自己の永遠の成道に資せんとす、故に流罪の苦を受くるも、苦中樂を感ずるを明す。この一段は聖人の慈悲の大なると發心の堅固なるとを示すものにして、日蓮は行願の爲めに、御勸氣を蒙むるも、却て法喜を増す、今例を擧げてこの心事を語らんか、小乗の菩薩の修行中に在りて、未だ斷惑せざる者にして願兼於業と云ふことあり、斷惑の人の濟度に出づるは論なき所なるも、未斷惑なるに慈悲の心強きが爲に、自ら向上する清淨の果報を捨て、或は惡世に生れ、或は惡

道に生れて父母等を救はんとしこれと同一の苦痛を享受し又はその苦に代はるを以て悦となすあり彼の小にしては囚人教化の爲めに小罪を犯して入獄の身となつて攝化を試むるが如し。此も又かくの如しとは今日蓮が幾多の法難を甘受するは有恩の人は勿論廣くは一切衆生の苦惱に代はらんとする大慈愍念の行願に出づ故に苦痛の重なるに随つて我が所願に酬ふるの想を爲して心竊に喜べるなり。當時佐渡謫居の責めは殘酷を極め食なく暖なく凍餒身に迫まるも復自己の菩提心は退轉せじとの發願に願みこの法難より得る功德の廣大なるを思ふ時そこに喜悅の力あり。故に他書に法弟檀越に報じて曰くいとかなげかせたまふべからずと。至誠一貫し慈心鏡石なるにあらずんば誰か能く斯くの如くなるを得ん嗚呼歎すべきかな。

但し世間の疑と云ひ自心の疑と申し、いかでか天扶け給はざるらん、諸天等の守護神は佛前の御誓言あり、法華經の行者は猿にいたりとも、法華經の行者と號せば、早々に佛前の御誓言をとげ

んとこそ、をばすべきに其の義なきは、我身法華經の行者にあらざるか。

一 再び疑問を設く

この處は再び疑問を設けて一層聖人の法華經の行者なるを明かにせんとし、諸天善神の守護を論ず。聖人の法華經の行者なるは、已に出現の時に徹し、勸持の敵人に照して、一點の疑義を挾むの餘地なきも、今は諸天の守護に就て、疑問を喚起し後の守護に關する教義を宣示せんとす。日蓮は法難を以て法悦と感ずる身、今更諸天加護の如何を念はざるも感應擁護の有無は宗教心の大事なれば、且らく翻つて世人の疑念と自心の疑義とを明かにせんとす。謂ふに諸天等の守護神は佛前に於て行者守護の誓言を立てたまへば、若し法華經の行者あるならば非徳猿の如しと雖も、法華經の行者と號して世に立つものあらんには急ぎ誓言を果さんと、加護の靈驗を垂れたまふべきに、今にその義なきは日蓮法華經の行者ならざるかと。前に言ふが如く、聖人は龍口御難に於て、感應頗る明確にし

て今も亦鎌倉へ生還を期し、縦し鎌倉殿はゆるさじとのたまふとも諸天等に申して必ず鎌倉へ還るべしと云ふ聖人確信のある所は知るべきが今は唯だ感應の義に關し微妙の旨致を宣揚せんとし、且つこの一事の爲に上行再身の上に疑雲のかゝりて佛教統一の大事に間隙に生ぜば是れ小少の事にあらず、故にこの點に向つて確信を與へんとするなり。

此疑は此書の肝心、一期の大事なれば、處々にこれを書く上、疑を強くして答を構ふべし。

一二 疑を強うして答を構へ以て本化の特權と示さんと欲す

この處は、日蓮は法華の行者なりや否やの一事は、この開目鈔の肝心たるのみならず、日蓮一期の大事なれば、數度この問題を提起し、疑を強めて正確なる答釋を與へんとするを述ぶ。何が故にこの一事重大なりやと云ふに初に記述せしが如く、上行再身の有無に依りて、佛教統一の大權を決すべきが故なり、佛教統一の中心教義は絶對の主師親に存じ、その義は壽量品の報應顯本にあること、既に願

る明白なり、大事の一語に迷うて宗祖本佛の義を立せんとするは、俗論曲説たるに過ぎず、片言隻語を曲用して教學の大綱を顧みざるが如きは、是れ全く俗學者流の事に屬す、故に予は本書講前の準備に於て、その大綱を詳述せり、翻つて再讀せんことを望む。

季札といひし者は心の約束をたがへじと、王の重寶たる劍を徐君が墓にかく、王壽と云ひし人は河の水を飲んで、金の鷺目を水に入れ、公胤と云ひし人は腹をさいて、主君の肝を入る、此等は賢人なり、恩を報ずるなるべし。況や舍利弗迦葉等の大聖は二百五十戒三千の威儀一もかけず、見思を斷じ三界を離れたる聖人也。梵釋諸天の導師、一切衆生の眼目なり。而るに四十餘年が間、永不成佛と嫌ひすてはてられてありしが、法華經の不死の良薬をなめて、燧種の生ひ、破石の合ひ、枯木の華果なんぞせるがこ

とく佛に成るべしと許されて、未だ八相を唱へず、いかでか此經の重恩をば報ぜざらん、若し報ぜずば彼々の賢人にも劣りて不知恩の畜生なるべし。毛寶が龜はあを(襖)の恩をわすれず、昆明池の大魚は命の恩を報ぜん、明珠を夜中にさげたり、畜生すら猶ほ恩を報ず、何に況や大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅喉羅尊者は淨飯王の孫なり、人中に家高き上證果の身となつて成佛をさへえられたりしに、八年の靈山の席にて山海慧蹈七寶華なんご如來の號をさづけられ給ふ。若し法華經ましまさずば、如何に家高く大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべき、夏の桀、殷の紂と申すは萬乘の主、士民の歸依なり、然れど政惡しくして世を滅ばせしかば、今にわるきもの、手本には、桀紂々々とこそ申せ、下賤の者も癩の者も、桀紂の如しといはれぬれば、の

られたりと腹たつなり。千二百無量の聲聞は法華經ましまさずば誰か名をも聞くべき、其の音をも習ふべき、一千の聲聞一切經を結集せりとも見る人よもあらじ、まして此等の人々を繪像木像にあらはして、本尊と仰ぐべしや。此れ偏に法華經の御力によつて、一切の羅漢歸依せられさせ給ふなるべし、諸の聲聞法華を離れさせ給ひなば、魚の水を離れ、小兒の乳を離れ、民の王を離れたるが如し、いかでか法華經の行者をすて給ふべき。

七二乗は法華の行者を守るべきを明す

一 世俗報恩の例を擧げて二乗の守護を論ず

この處は、世間の賢人すら報恩を忘れず、二乗の人何ぞ法華の重恩を忘れて可ならんや、猶ほ畜生すら恩を報ず、若し二乗にして忘恩に陥らば、畜生にも劣るべきことを明す。彼等は家高く證果の聖人なり、幸に法華經に於て成佛を許さる法華經なくば、彼々の聖者は憐れなる境界に墮つべかりしなり、然らば何ぞ法華經

の行者を捨て、守らざるの理あらんやと言ふ。文章重疊して義趣愈強く讀む者をして汗を握らしむ、聖人獨得の筆致この間に躍如たり之を以て聖人の思想の湧くが如く豊富にして、理解の極めて精微なるを知るべく、又之を辯論として發したまは、流暢珠を盤に走らすが如くにして、慈愍の感花を興へ、摛縦自在にして、順逆共に法化に潤ひしを窺ふに足らん。又文中には報恩の道義を以て一貫し、佛徒は世の賢人よりもこの道義を實行するを以て當然となし。又桀紂の無道なりしは、賤民癩病人も之に比せらるゝを厭ふを擧ぐ、この文は貞觀政要より來る。又民の王を離れしが如しと云つて、國民の安寧幸福は王者に依つて保維せらるるを示し、今日の露國の如き悲惨事を誠め、斯くして二乗の守護に託して重大なる道義を闡示す、こゝに聖人の抱懷せられし道念の如何に調節と統一を得たりしかを見るべく、この諸點はこの一段の文章に就て靜思すべき所ならんか。八相とは、下天託胎、出胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃なり。彼等は記莖を得たるも未だ八相成道を示さず、日尙ほ淺し、何を法華の恩を忘るるの暇あらんやと云ふなり。季札の事は史記吳の世家一に出づ、季札は吳の王壽夢が季子な

り初め北のかた徐君を過ぎる、徐君季札の劍を好むも口に敢て言はず、季札心に之を知れり、上國に使用するが爲めなれば、未だ献せず、還つて徐に至るとき徐君已に死す、乃ち寶劍を解いて徐君の塚の樹に係て去る。從者の曰く、徐君已に死す、尙ほ誰にか予へんや、季子曰く、然らず、始め吾れ心に之を許しき、豈に死を以て吾が心に倍かんや、と札延陵に封ぜらる、故に延陵季子と號す。新序に曰く、徐人嘉みして之を歌うて曰く、延陵季子兮不忘、故脱千金之劍、今帶丘墓、と地志に曰く、徐君の廟は泗洲の徐城縣の西南一里に在りと。王壽の事は、風俗通に云く、郝子廉飢へて食を得ず、寒へて衣を得ざるも、一介も人に取らず、曾て姊に過ぎりて飯す、錢を掃下に留めて去る、行く水を飲む毎に常に一錢を井中に投ずと。毛寶の事は、蒙求中の卷に出づ。昆明池の大魚の事は、勸善書十四に出づ、漢の武帝昆明池に水戰を習はす、池は白鹿原に通ず、帝魚の釣を去らんと求むるを夢む、明日果して大魚の索を啣むを見、釣を去つて之を放つ、帝後に明珠を得たりと。

諸の聲聞は爾前の經々にては、肉眼の上に天眼慧眼を得、法華經

にして法眼佛眼備はれり、十方世界すら猶ほ照見し給ふらん、何に況や此の娑婆世界の中の法華經の行者を、知見せられざるべしや。

二四〇

二 二乗の知見に約して守護を論ず

この處は、二乗の知見に約すれば、照見する所分明なるべく、今法華經の行者の出現せるを知らざるの理なし、然らば何ぞ守護を爲さざるべきやと言ふ

五眼の事は、大論に出づ、父母の血氣を假り、色質障碍あるは肉眼なり、禪定の力色質の碍けを受まざるは天眼なり、一切法皆定を觀ずるは慧眼なり、行に依り證を得て方便を成就するは法眼なり、前の四眼を自在に應用するは佛眼なりと。

設ひ一日蓮惡人にて、一言二言、一年二年、一劫二劫、乃至百千萬億劫、此等の聲聞を惡口罵詈し奉り、刀杖を加へまいらする色ありとも、法華經をだにも信仰したる行者ならば、すて給ふべからず、

譬へば幼稚の父母をのる(鬻)父母之を捨つるや、梟鳥母を食ふ母これを捨てず、破鏡父を害す、父之に順ふ畜生すら猶ほかくのごとし、大聖法華經の行者を捨つべしや。

三 何等の事情あるも行者を守るべきを論ず

この處は他事に於て、反對ありとも法華經の行者ならば、二乗の人は必ず守護あるべきを論じ、梟鳥の母等の例を擧げて、若し守護なくんば、慈念足らざるの責あらんと諫曉す。日蓮假りに二乗の聖者に反對を爲し、或は罵詈し、或は刀杖を加へしことありとも、この相互間の反對の爲めに法華經に依つて結ばれたる親愛の關係を捨つべきにあらず。今卑事を以て例せんか、禽獸猶ほ戀愛の爲には自己の不利を忘れて愛護を捨てず、大聖何ぞ法華經の行者を捨つべけんや。破鏡の事は、首楞嚴經第七に云く、土梟等の如き塊に附いて兒を爲す、及び破鏡は毒樹の果を以て、抱いて其の子と爲す、子成れば父母は皆其の食るゝに遺ふ。梟は鳥の名母を食ひ、破鏡は獸の名父を食ふと、鏡は本と貌に作る、音は敬なり。

二四一

されば四大聲聞の領解の文に曰く、我等今は眞に是れ聲聞なり
 佛道の聲を以て一切を聞かしむ。我等今は眞の羅漢なり諸の
 世間天人魔梵に於て、普く其中に於て當に供養を受くべし。世
 尊は大恩まします希有の事を以て憐愍教化して我等を利益し
 たまふ、無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん、手足をもて供給
 し頭頂もて禮敬し、一切もて供養すとも皆報ずること能はじ。
 若は以て頂戴し兩肩に荷負して恒沙劫に於て、心を盡して恭敬
 し、又美膳無量の寶衣及び諸の臥具の湯藥を以てし、牛頭梅檀及
 び諸の珍寶以て塔廟を起て、寶衣を地に布き、斯くの如き等の事
 以て用て供養すること恒沙劫に於てすとも、亦報ずること能は
 じ等と云々。

四 法華の法恩を擧げて行者を守るべきを證す

この處は、法華經信解品に於ける四大聲聞の領解感恩の文を擧げて、彼等大聖は
 行者を守るべき所以を明す。この經文を見れば、彼等聲聞衆の歡喜の狀明かに、又
 佛恩法恩に感激せることも頗る明白にして、報恩の眞情溢るゝが如し、此の如き
 感恩の心ある大聖何ぞ法華の行者を守護したまはざらんや。

諸の聲聞等は前四味の經々に、いくそばくぞ(幾許)の呵責を蒙む
 り、人天大會の中にして、耻辱がましき事其の數をしらず。しか
 れば迦葉尊者の啼泣の音は三千をひゝかし、須菩提尊者は茫然
 として手の一鉢をすつ、舍利弗は飯食をほき、富樓那は畫瓶に糞
 を入ると嫌はる。世尊鹿野苑にして阿含經を讚歎し、二百五十
 戒を師とせよなんぞ、慇懃にほめさせ給ひて、今又いつのまに我
 が所説をば、かうはそしらせ給ふとは、二言相違の失とも申しぬ
 べし。例せば世尊提婆達多を汝愚人、人の唾を食らふと罵詈せ

させ給ひしかば、毒箭の胸に入るが如くをもひて、うらみて曰く
 瞿曇は佛陀にはあらず、我は斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が
 一類なり、いかにあしき事ありとも、内々教訓すべし、此等程の人
 天大會に、此れ程の大禍を現に向つて申す者、大人佛陀の中にあ
 るべしや、されば先々は妻のかたき今は一座のかたき、今日より
 は生々世々に大怨敵となるべしと誓ひしぞかし。此を以て思
 ふに、今諸の大聲聞は本と外道婆羅門の家より出でたり、又諸の
 長者なりしかば、諸王に歸依せられ諸檀那に尊とまる、或は種姓
 高貴の人もあり、或は富福充滿のやからもあり、而るに彼々の榮
 官をうちず、慢心の幢を倒して、俗服をぬぎ壞色の糞衣を身に
 まとひ、白拂弓箭等をうちずて、一鉢を手ににぎり、貧人乞弓コウな
 んごのごとくして、世尊につき奉り、風雨をふせぐ宅もなく身命

をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海皆外道の弟子
 檀那なれば、佛すら九横の大難にあひ給ふ、所謂提婆が大石をと
 ばせし阿闍世王の醉象を放ちし、阿耆多王の馬麥婆羅門城のこ
 んづ漿施遮婆羅門女が鉢を腹にふせし、何に況や所化の弟子の
 數難申す計りなし。無量の釋子は波瑠璃王に殺され、千萬の眷
 屬は醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆に害せられ迦盧提夷尊者
 は馬糞にうづまれ、目連尊者は竹杖に害せらる。其の上六師同
 心して阿闍世婆斯匿王等に讒奏して曰く、瞿曇は閻浮第一の大
 悪人なり、彼がいたる處は三災七難を前まへとす、大海の衆流をあつ
 め大山の衆流をあつめたるがごごし、瞿曇が所には衆惡をあつ
 めたり、所謂迦棄舍利弗、目連、須菩提等なり。人身を受けたる者
 は忠孝を先きとすべし、彼等は瞿曇にすかされて、父母の教訓を

も用ゐず、家をいで王法の宣旨をもそむいて山林にいたる、一國に跡をとどむべき者にはあらず。されば天には日月衆星變をなす。地には衆天さかんなりなど訴ふ。堪ふべしとも覺へざりしに、又うちそうわざわいと佛陀にもうちそひ難くてありしなり。人天大會の衆會の砌にて、時々呵責の音をきゝしかば、如何にあるべしとも覺へず、只あわつる心のみなり。その上大の大難の第一なりしは、淨名經に其れ汝に施す者は福田と名けず汝を供養する者は三惡道に墮ちなん等と云々。文の心は佛菴羅苑と申すところにおはせしに梵天、帝釋日月四天三界諸天地神龍神等無數恒沙の大會の中にして曰く、須菩提等の比丘等を供養せん天人は、三惡道に墮つべし、此等をうち聞く天人、此等の聲聞を供養すべしや。詮ずる所は佛の御言を用て諸の二乗を

殺害せさせ給ふかと思ゆ。心あらん人々は佛をも疎みぬべし。されば此等の人々は、佛を供養したてまつりしついでにこそ、わづかの身命をも扶けさせ給ひしか。

五 爾前に於ける二乗の失望を擧ぐ

この處は、爾前諸經に於ける二乗の失望の状態を詳叙し、以て反面より法華の法恩の重大なるを證明し、且つ二乗の聖者も法華の行者を守護せらるべき義を決論せんとするなり。爾前の諸經を披き見れば、二乗の人を貶斥すること極めて峻烈にして殆んど權大乘の諸經は一齊に之を攻撃せり、而して聲聞等が失望の嘆聲を放ちしことも數々にして、小乗と大乘との相違は恰も別人の説の如き觀あり、斯の如き相違は頗る解し難きことにして、世尊の深意を領解せずんば、佛教は遂に信敬すべき價值を失ふべし。これ法華開顯の一事、佛教の死活に關する所以なり。彼の提婆に對する誡告の嚴なりし爲に彼が怨恨を重ねしに見れば、若し權大乘の如き二乗破斥の説を以て佛教の終りを告げんか、佛陀の圓慈は認

むるに由なく、佛教の歸依は價值なきに終らん斯く聲聞衆等を貶挫するも、彼等は當時の人の子にして或ひは氏族高貴の者あり、或は富福長者の人あり、而も佛陀を信頼して各々その地位を捨て富を擲ちて、清淨の修行に加はりしなり。且つ當時印度の大部分は皆婆羅門教の教勢下に屬し、隨つて迫害を受くること少なからず、世尊九横の難より推知するも弟子等の遭難より考察するもその困難なりしの状態見し難からず、時に惡王の出て、殺戮を加へしあり、時に暗殺の行はれ時に殘害を蒙むること枚擧に遑あらず、彼の外道輩の讒言の一節を見るも社會的勢力よりして佛教に迫まりし、妨害の狀頗る強かりしを知るべし。彼等聲聞衆はこの迫害に抗して淨行を勤修せる聖者なり、然るに世尊は權大乘の時に在りては、何等同情の心なきもの、如く淨名經に於ては、その施を禁止せんとす、佛弟子の常法は日々托鉢の行に依る外食物金錢の貯藏を許さず、故に忽ちにして食に離れ生命を繼ぐ能はざらんとす、これ及を以てせざるも、舌鋒を以て殺戮を興ふるに異ならず、その悲惨こゝに至りて極まる、只彼等は佛飯の餘殘を得て幸に餓死を免がれたるのみ、抑も斯くの如き前後矛盾の教化を以て佛教の終

りを告ぐるることあらんには、佛陀は最も不明殘忍の罪を辭するを得ず、然れば法華の開顯に至りて二乗作佛の梵音響き渡りてこの權大乘の所説を一時假定の方便なり、教化の手段に過ぎずと明白に解決を下すにあらざるよりは、佛教の首尾一貫せざるべし、佛陀絶大の智慧何を以て光顯すべき、而して二乗の人はこの爾前の所説に壓せられし當時と法華開顯の梵音に接せし時、とを對比して追憶を辿る時、法華の法恩の海大なるを感じ、その報恩の精神より起つて、法華行者を守護する誓言を果さるべきなり。この文中に二乗に同情せる意味の高調せられたるは、留意すべき所にして、榮官富福を擲ちて世尊につき奉り、風雨をよせぐ宅もなく、而も信順の誠を致せるを説き、以て二乗に同情せるの狀、これ實に佛教大藏を涉獵して得たる所にして、聖人が卓越せる佛教觀の根元なり、權大乘經を所依とせる諸宗の人生生活と没交渉となるも、或は現實の倫理を輕視するに至るも、皆この一事より發す。又外道が佛陀を非難する論旨の道德的なるを認め、その道德を忠孝に置き、而して佛陀は忠孝の道義を無視するが故に、一國に跡をとどむべき者にはあらずと訴へしと云ふ、この外道よりの非難すら已に此の如

くなるを認むるに於て自ら立つる佛教の主義としてこの種の非難に觸るゝが如き愚に甘んぜざるべきは見易き所なり而るに徳川氏時代に破佛論の起りしによりて今日尙ほ我國に於て佛教の興立を妨ぐる第一主因は佛教は道義を重んぜず忠孝の大倫を輕視すとの非難に存す顧みて佛教の宗派を觀れば如何に表面を糊塗するともこの非難の肯綮に當れるを否む能はざるものあり何ぞ護法の根本精神に溯らざる區々なる學派は畢竟佛教の支流なり枝葉の爲めに根幹を枯さんとするは是れ決して賢者の事にあらず各宗の徒遂にそれ醒めざるか跪辨を去つて純良に判斷せよ。

迦葉の啼泣とは淨名經不思議品に云く大迦葉は菩薩の不可思議解脱の法門を開き未曾有なりと歎じ舍利弗に謂ふ譬へば人あつて盲者の前に於て衆の色像を現ずとも彼れの所見にあらざるが如し一切の聲聞是の不可思議解脱の法門を聞いて解了する能はざること此の若しと爲す。智者は是を聞いて其れ誰か阿耨菩提心を發さざらん我等何爲ぞ永く其の根を絶つや此の大乗に於て已に貶種の如し一切の聲聞は是の不可思議解脱の法門を聞いては皆應に號泣して

聲三千大千世界に震ふべしと。須菩提茫然たりとは淨名經弟子品に云く其れ汝に施す者は福田と名けず汝を供養する者は三惡道に墮ちなん爲めに衆生と一手を共にして諸勞の侶と作れ汝は衆魔及諸の塵勞と等ふして異なること無し一切衆生に於て怨心あつて諸佛を謗り法を毀り衆の數に入らず終ひに滅度を得ずと。我が世尊よ此を聞いて忙然として是れ何の言といふことを識らず何を以て答へんかを知らず便ち鉢を置いて其の舍を出てんと欲す。維摩詰言く唯だ須菩提よ鉢を取れ懼るること勿れ。舍利弗食を吐くとは輔行二に云く羅云佛に従つて經行す佛羅云に問ひたまはく何爲ぞ羸れ瘦せたる羅云偈を以て佛に答ふ若し人油を食すれば則ち力を得若し蘇を食すれば好色を得んも麻滓菜を食すれば色力無けん大徳世尊よ自ら當に知るしめすべしと。佛羅云に問ひたまはく是の衆中に誰か上座たりや羅云は和上舍利弗なりと答ふ。佛言はく舍利弗は不淨の食を食すと。時に舍利弗轉じて是の語を聞き即時に食を吐出し是の誓言を爲す我れ今日より復請を受けざらんと。富樓那晝瓶の事は同經富樓那章に出づ穢食を以て寶器に置くこと無し焉と。九横の大難の事は

大智度論九に出づ今擧ぐる所の1孫陀利の謗2旃遮女の謗3提婆の擲石4迷木刺脚5毗樓璃王の殺害6阿耨多王の馬麥7冷風脊痛8六年苦行9空鉢遺歸是なり。提婆擲石の事は増一阿含四十七に出て阿闍世醉象の事は同經四十七に出づ。馬麥の事は毘奈耶十一に漿の事は大論八に旃遮女の事は菩薩處胎經五に波瑠璃王の事は増一阿含二十六に醉象に蹈まるゝ事も同處に華色尼の事は大論十四に迦留陀夷の事は諸經要集十四に目連竹杖の事は毘奈耶二に出づ。されば事の心を案ずるに、四十餘年の經々のみ説かれて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給ひたらましかば誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき現身に餓鬼道にこそをはすべけれ。而るに四十餘年の經々をば東春の大日輪寒氷を消滅するがごとく、無量の草露を大風の零落するがごとく、一言一時に未顯眞實と打ち消し、大風の黒雲を捲き、大虛に滿月の處するがごとく、青天に日輪の懸り給ふがごとく、世尊法久後要當説眞實と

照させ給ふて、華光如來光明如來と舍利弗迦棄等を赫々たる日輪明々たる月輪のごとく、鳳文にしるし龜鏡に浮べられて候へばこそ如來滅後の人天の諸檀那には、佛陀のごとく仰がれ給ひしか水すまば月影ををしむべからず、風ふかば草木なびかざるべしや。法華の行者あるならば此等の聖者は大火の中をすぎても大石の中をとりても、とぶらはせ給ふべし。

六 法華の法恩を擧げて行者を守るべきを決す

この處法華に至りて二乗作佛を許せし教義の光顯せられしは、是れ最も珍重すべき所にして、この權實の分界を明斷せざれば佛教の首尾一貫せざると同時に二乗の人は浮ぶ瀬を失ふべく、故に法恩に酬ふる爲に行者を守るべきを明す。この權實の分判は極めて明確なるを要し、徹底を尊むべきものにして、若しこの間を混同的に瞞化せんか、佛教は朦朧たる教義と化し二乗は終ひに救はれざるべし、二乗とは則ち當時の人なり、人にして救はれずんば宗教として何の價値を

か認め得べきこれ等を思ふに二乗の聖者は如何なる困難を排しても、法華經の行者を守護し、以て法華の重恩に答へたまふべきなりと。この文に權實の分判を極めて明確なる譬に寄せて示されしは、深く考量すべき所なり、往々權實を峻別するを否む者あり、是れ恰も東風到るも氷の解くるを否み、風吹くも露の落ちざるを望み、黒雲の吹き拂はれずして低徊し、月出づるも薄雲に覆はれ日昇るも暗の存せんを思ふと一般、その不徹底は殆んど暗愚に類す、今聖人は之を最も分明に決斷するに於て、佛教の光輝を放つべきを宣示す、この間の領悟的確ならずんば、本化別頭の教觀は會得するに由なかるべし、學者之を思へ、又聖者の守護は如何なる困難を排しても、實行せらるべきを形容して、大火の中を過ぎて、大石の中を通ほりてもと云ふ、日蓮の力強き文學は、斯かる文章に就て學ぶを得んか。迦葉の入定もことにこそよれいかにとなにぬるぞ、いぶかしとも申すばかりなし、後五百歳のあたらざるか、廣宣流布の妄語となるべきか、日蓮が法華經の行者ならざるか。法華經を教内と

下して別傳と稱する、大妄語の者を守り給ふべきか、捨閉闍拋と定めて、法華經の門を閉ぢよ卷をなげすてよとゑりつけ、彫刻て法華堂を失へる者を守護し給ふべきか。佛前の誓はありしかども、濁世の大難のはげしきを見て、諸天下り給はざるが。日月天にまします、須彌山いまもくづれず、海潮も増減す、四季もかたのごとくたがはず。いかになりぬるやらんと大疑いよくつもあり候。

七 更に守護なきの疑を擧ぐ

この處は、前段理として守護あるべきを決せしが、今は事實に守護なきは何故なるかを論じ、その守護なき所以を想像して疑義を構へ、以て後の左券と爲す。迦葉尊者は釋尊の袈裟を奉持して、後の彌勒の出現を待つ爲に、雞足山に入定すと聞くも、事の輕重に由つて去就を改むべきは當然にして、袈裟の奉持は大切なるべけれど、法華の重恩を思はゞ、定より覺めて法華行者を守るべきに、如何なる子

細のありてか斯く法華の行者が窮迫せられ、北海孤島の雪中に俄に苦めらるゝを餘所に見て、何等の擁護靈感の來らざるは不審晴れやらす、想ふに後五百歳の金言の當らざるか、廣宣流布の識言の虛妄と成ぬるか、然らずんば日蓮が法華經の行者ならざるか、若し日蓮を除いて他に之を求めんか、彼の法華經等を教内と下し、教外列傳の佛心印ありと云へる、大安語の者却て法華經の行者たるべきか、捨閉閣抛と論じて、法華經を貶挫する者亦法華經の行者なるべきか、彼等は事實に法華の寺塔を滅亡せしめつゝあるにあらざるや。若し然らずとせば、佛前にて法華經の行者守護の宣誓を致されしも、濁世の大難の豫想よりも激烈なるを見て、諸天恐怖を懷いて下りたまはざるか。今現に日月は天に在し、須彌山も頽れず、海潮も増減し、四季は天變ありつれども、大體その運行止まず。天地未だ頽れざるに、大聖の誓言變はるべき所になし。思ひ來り思ひ去つてこれ等の諸義一も理ありとは信ぜられず、然らば何故に加護なきか、沈思冥想すれば、大疑愈疑つて解けがたし。これ等の疑問も、後年鎌倉生還の靈驗に由つて、一切解決を得るなり。この一節にも、日蓮の至誠鬼神を動かす底の文學を發見すべし。迦葉入

定の事は、大婆娑論百三十五に曰く、曾て聞く尊者大迦葉波、王舍城に入り、最後に乞食し、食し已つて未だ久しからず、雞足山に登る、山に三峰あり、雞の足を仰ぐが如し。尊者中に入つて結跏趺坐し、誠言を作して曰く、願くは我が此の身并に鉢杖を納め、久住して壞れざらん。乃至五十七俱胝六十百千歳に、慈氏如來應正等覺世に出現したまはん時、佛事を施作せんと。此の願を發こし已つて尋いて般涅槃すと。

又諸大菩薩天人等のごときは、爾前の經々にして記別を得るやうなれども、水中の月を取らんとするがごとく、影を體と思ふがごとく、いろかたちのみあつて實義なし。又佛の御恩も深く、深からず、世尊初成道の時は、未だ説教もなかりしに、法藏菩薩功德林菩薩金剛幢菩薩金剛藏菩薩等なんぞ申せし、六十餘の大菩薩、十方の諸佛の國土より、教主釋尊の御前に來り給うて、賢首菩薩解脫月等の菩薩の請にをもむいて、十住十行十廻向十地等の

法門を説き給ひき。此等の大菩薩の所説の法門は釋尊に習ひたてまつるにあらず、十方世界の諸梵天等も來りて法を説く、又釋尊に習ひたてまつらず、總じて華嚴會座の大菩薩天龍等は釋尊已前に不思議解脱に住せる大菩薩なり、釋尊の過去因位の御弟子にやあらん、十方世界の諸佛の御弟子にやあらん。一代の教主始成正覺の佛の弟子にはあらず。阿含方等般髻の時四教を佛の説き給ひし時こそ、やうやく御弟子は出來して候へ此も又佛の自説なれども、正説にはあらず、ゆへいかんとなれば、方等般若の別圓二教は、華嚴經の別圓二教の義趣をいはず、彼の別圓二教は教主釋尊の別圓二教にはあらず、法慧等の別圓二教なり。此等の大菩薩は人目には佛の御弟子かとは見ゆれども、佛の御師ともいぬべし、世尊彼の菩薩の所説を聽聞して、智發して後

重ねて方等般若の別圓を説けり、色もかわらぬ華嚴經の別圓二教なり、されば此等の大菩薩は釋尊の御師なり。華嚴經に此等の菩薩をかすへ(數)て、善知識と説かれしはこれなり、善知識と申すは一向師にもあらず、一向弟子にもあらずある事なり。藏通二教は又別圓の枝流なり、別圓二教を知る人必ず藏通二教を知るべし。人の師と申すは弟子の知らぬ事を教へたるが師にては候なり。例せば佛より前の一切の人天外道は二天三仙の弟子なり、九十五種まで流派したりしかども三仙の見を出でず、教主釋尊も彼に習ひ傳へて、外道の弟子にてましませしが、苦行樂行十二年の時、苦空無常無我の理をさとり出で、こそ、外道の弟子の名をば離れさせ給ひ、無師智とはならせ給ひしか、又人天も大師とは仰ぎまいらせしか。されば前四昧の間は教主釋尊は

法慧菩薩等の御弟子なり。例せば文珠は釋尊九代の御師と申すが如し。つねに諸經に不說一字と說かせ給ふもこれなり。

八菩薩諸天法華の行者を守るべきを明す。

一 爾前には佛恩なきの義を擧ぐ

これより已下は菩薩諸天の法華經の行者を守護せらるべき所以を闡明するなり。而してこの處は爾前の諸經のみならば佛恩決して深しと謂ふべからざるを示す。爾前の經中にも時に菩薩諸天に佛記を與へて後來の成佛を保證することあるも、これ皆有文無義に屬し、恰も水中の月を取つて悦び影を逐うて體を知らざるが如く、寔に詮なき事なりされば爾前經の教化に在りては佛恩の深厚を認むる能はず。現に華嚴の經卷を抜き見れば、十方より菩薩來集して大乘の法門を宣說す、釋尊の所説は殆んど之れ無し、阿含方等般若に於て初めて釋尊の自説は宣示せられしものにして、之を釋尊の教化と稱すべく、而もその内容は華嚴に説きし別圓二教を出てず、故に是れ自説にして自説にあらざ、藏通二教は別圓二教已下なれば、之れあるも尊としとするに足らず。本と釋尊は外道の教義

を習ひしが、小乗の教義を説いて、無師智の稱を得たまひしなり、故に十方來集の菩薩の説かざるそれ已上の教義を説かずば、釋尊の妙説として見るべきものなし、故に法華已前の釋尊は或は文珠の弟子と云ひ、或は常に諸經に一字不説と云ふはこれが爲めなるか。この一段の記述は巧妙の筆致にして、敢て佛敎觀の本旨を宣示するにはあらず、法華の法恩を鮮明ならしむる爲に、この種の巧説を立つるのみ聖人が佛敎觀の眞意は斯かる記述の間に於て見るべきにあらず。

藏通別圓の事は藏教とは、含藏の義、經律論の文理を包含するを云ひ、通教とは前藏教に通じ、後別圓に通ずるを云ひ、別教とは隔別の義にして、前の藏通に別にして、後の圓教に別なるを云ふ、圓教とは圓は相即不偏の義にして、性相圓融事理無碍にして、法々具足するを云ふ。阿含經は藏教、華嚴教は別圓二教、方等は四教並説、般若は通別圓の三教、法華は純圓一實、涅槃は扶律談常と云ふは、天台一家判敎の綱要なり。

菩薩を善知識となす事は、華嚴經四十五に云く、如來の自在神力を顯現したまふ、其れ衆生あつて、如來の自在神通力を見聞し、念知するものは、皆佛の宿世の善知

識なり師とは、弟子の知らざる事を教ふとは、韓退之曰く古の學ぶ者は必ず師あり、師とは道を傳へ業を授け惑を解く所以なりと。苦行樂行十二年とは六年の修行を苦行として見ると樂行として見るとの二面あり故に合して十二年と云ふのみ實際の年月は六年なり。不説一字とは法性離言の義なるも今は轉用するのみ。文珠は九代の師と云ふは傳説に過ぎず。

佛御年七十二の年、摩提國靈鷲山と申す山にして無量義經を説かせ給ひしに、四十餘年の經を擧げて、枝葉をばその中におさめ、四十餘年未顯眞實と打消し給ふはこれなり。此時こそ諸大菩薩諸天人等はあわて、實義を請せんとは申せしか、無量義經にして實義とをばしき事一言ありしか、未だまことなし。譬へば月の出でんとして其體東山にかくれて、光り西山を及べども、諸人月體を見ざるが如し。法華經方便品の略開三顯一の

時、佛略して一念三千心中の本懷を宣へ給ふ、始めの事なれば、ほととぎすの音を、ねをびれ、寢惚たる者の一音き、たるがやうに月の山の半に出でたれども、薄雲のをほへるがごとく、かそかなりしを、舍弗利等驚いて諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神其の數恒沙の如く、佛を求むる、諸の菩薩大衆八萬あり、又諸の萬億國の轉輪聖王の至れるも、合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請せしなり。文の心は四味三教四十餘年の間いまだ聞かざる法門うけたまはらんと請せしなり。

二 法華に於て始めて未開の大法を請せしを擧ぐ

この處は菩薩諸天は法華經に來つて始めて未開の大法を請せしを論明す。佛御年七十二始めて靈鷲山に於て法華經の開經たる無量義經を説くに及んで、爾前四十餘年の經々に説ける華嚴方等般若の如き重要なる經名を列ね、その他枝

葉の小經は之に攝し、一括して未顯真言と宣告したまひぬ。この權實の榜示に驚いて大乘はここに真言の法義を宣示したまはんことを懇請せり。而もこの無量義經に於て實義と思はるは唯だ一言のみ、其は無量義は一法より生ずの一語なり、この一法は果して何なりやに關しては開説したまはずして後の法華經に譲られしなり、故に之を譬ふれば月の出でんとして、その體東山に隠れ漸く光り西山を照すも、人々は未だ月の體を見ざるが如し。次に法華經方便品に遡りて、略開三顯一の説法に、概略一念三千の法義を示し、諸法實相十如一實の義顯はれ、ここに佛の本懷は始めて暢達したりしも、未だ略説に止まりしかば、恰も時鳥の一聲を眠れる人の覺不覺の間に耳にせしが如く、月已に東山に昇りしも、薄雲の蔽へるが如き光景なりき。されば舍利弗等は願求の心に促され、大衆と共に一心に具足の道を開きたてまつらんと、三請して止まざるに至れり。この一節は頗る巧妙なる譬喩例證に寄せて、無量義經の權實分判と、一法開顯の序分と、迹門の略開三との狀況を論示したまふ、この重大難解の法門を、斯かる優美輕妙の筆致に於て、極めて適切に且つ鮮明に言明したまふは、是れ亦聖人獨歩の境地

なり、教學の練磨に苦心せる者は、この喩説の巧妙に對して必ずや感動の深きものあらん。

略開三顯一の事、一念三千の事は前に已に講述せり。四味、三教とは乳味、酪味、生蘇味、熟蘇味、を華嚴阿含、方等般若に喩へ、藏通別を三教と云ふ。

此の文に欲聞具足道と申すは、大經に曰く、薩とは具足の義に名く等と云々。無依無得大乘四論立義記に曰く、沙とは譯して六と云ふ、六とは胡法六を以て具足の義と爲す也等と云々。吉藏の疏に曰く、沙とは翻じて具足と爲す等と云々。天台の立義八に云く、薩とは梵語なり、此には妙と翻ずる也等と云々。付法藏の第十三眞言華嚴諸宗の元祖本地法雲自在王如來、迹に龍猛菩薩、初地の大聖の大智度論の肝心に曰く、薩とは六なり、等と云々。妙法蓮華經と申すは漢語也、月氏には薩達磨、芬陀利伽、蘇多覽と

申す。善無畏三藏の法華經の肝心眞言に曰く、曩謨三曼陀沒馱
南、歸命普佛陀、唵、三身如來、阿、阿、阿、暗、惡、開、示、悟、入、薩、縛、勃、陀、(一切佛) 積、攘、如、娑
乞、芻、毗、耶、(見) 我、々、曩、三、娑、縛、(如虛空性) 羅、乞、又、備、離、塵、相、薩、哩、達、磨、(正法)
陀、哩、迦、(百蓮華) 蘇、多、覽、經、惹、入、(吽) 遍、鑿、住、發、歡、喜、縛、曰、羅、堅、固、羅、乞、又、輪
(擁護) 吽、空、無、相、無、願、娑、婆、訶、(決定成就)。此の眞言は南天竺の鐵塔の中
の法華經の肝心の眞言也。此の眞言の中に薩哩達磨と申すは
正法なり、薩と申すは正也、正は妙也、妙は正也、正法華妙法華是れ
也。又妙法蓮華經の上に南無の二字ををけり南無妙法蓮華經
これなり。妙とは具足、六とは六度萬行、諸の菩薩の六度萬行を
具足するやうをきかんとをもう。具とは十界互具、足と申すは
一界に十界あれば、當位に餘界あり、滿足の義なり。此經一部八
卷二十八品、六萬九千三百八十四字、一一に皆妙の一字を備へて、

三十二相八十種好の佛陀なり。十界に皆己界の佛界を顯す妙
樂曰く、尙ほ佛果を具す餘果も亦然り等と云々。佛此を答へて
曰く、衆生をして佛知見を開かしめんと欲す等と云々。衆生と
申すは舍利弗衆生と申すは一闍提衆生と申すは九法界衆生無
邊誓願度此に滿足す。我れ本と誓願を立て、一切の衆をして
我が如く等ふして異なること無らしめんと欲す、我が昔の所願
の如きは、今は已に滿足しぬ等と云々。諸大菩薩諸天人等此の
法門を聞いて領解して云、我等昔より來た、數々世尊の説を聞
くにと謂へるは、法華經の前に説きし華嚴等の大法也、未だ曾
て是の如き深妙の法と謂へるは、未だ法華經の唯一佛乘の教を
聞かざる也等と云々。華嚴方等般若深密大日等の恒河沙の諸
大乘經は、いまだ一代の肝心たる一念三千の大綱骨髓たる二乘

作佛、久遠實成等をいまだきかずと領解せり。

二六八

三 具足道とは即妙法にして又是れ記小久成なるを擧ぐ

この處は大衆の懇請せし具足道とは、即是れ妙法蓮華經にして、その妙法の内容は二乗作佛と久遠實成の二大教義に外ならず、二乗作佛は十界互具一念三千の歸趣にして、久遠實成は是れ亦一念三千より起る佛身觀の要諦なれば、ここには具足道と妙法との二大教義の關聯を明かにし、又南無妙法蓮華經と信唱する所以を説す。今彼等が欲聞具足道と請ひしが、その具足道とは妙法是れなり、大經即ち大涅槃經の文字品に四十二字を解説する中に、薩とは具足の義に名くと云ふ、薩の原字は札なり、四論玄義記吉藏の法華玄論と天台の玄義と龍樹の大智度論との四書何れも薩を具足の義と爲せり、今妙法蓮華經とは羅什三藏の譯する所にして、その原語は薩達磨芬陀利伽蘇多覽なり、サは妙、タルマは法、フンダリカは蓮華、ソタランは經と譯せり。又善無畏が法華の眞言と稱して珍重する者を見るに、この事は印融の諸尊眞言句義鈔の上と仁海の眞言集に出づ、ナウマクは歸命と譯す、南無と同じ、マンマンダゴダナンは普佛陀とも譯す、オーンは三身

如來の義なり、これまでは諸佛三身如來に歸命するを云ふ。アアリアンアクは開示悟入の義なり、サルバボダは一切の義、キナウサキシユビヤは知見の義なり、この意は一切佛の知見に開示悟入せしめたまふを云ふ。ギャギヤナウサンサバは如虛空性の義、アラキシヤチは離塵相の義なり、この意は實相の妙理は虚空の普遍常住にして動轉なきが如くなれば、之を如虛空性と云ひ、煩惱染穢を離れて清淨無垢なれば、之を離塵相と云ふ、サリダルマフンダリカソタランは妙法蓮華經又は正法蓮華經と譯す。ジャウンバンコクは入徧住歡喜と譯し、バザラアラキシヤマンは堅固擁護と譯し、ウンソハカは空無相無願決定成就と譯す、ジャウン已下の意は行者妙法蓮華經の教に入り徧く住し歡喜の益を得て、道念堅固ならば佛陀の擁護を得て、空無相無願の大願を決定成就すべしと云ふにあり。日講の啓蒙には之を詳説せり。日蓮聖人はこの眞言を援引して曰く、薩哩達磨は正法華とも妙法華とも譯す、正妙相通ず、又今はナウマクと云つて妙法蓮華經の上に南無の二字を置けり、是れ南無妙法蓮華經と信唱する一箇の典據なりと。この題目信唱を眞言の義より取れるは、只一義門に過ぎず、法華經壽量品神力品

二六九

等の正統教義は佛寶法寶の關係を示すこと頗る分明にして、之を良醫良藥に比し、又四句の要法には皆如來一切の語を冠して、果分の義を明かにす、故に本尊鈔に於ては、或は果分の法と云ひ、或は父の法と云ひ、而も最結の文に至りて、佛大慈悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて、末代幼稚の頭に懸さしめたまふと宣示し、法蓮鈔には、母の食物の乳となつて赤子を養ふが如しと説けり、この本佛と妙法五字との關係を分離して文字を獨立的に崇拜し、之を以て絶對最高の教義と思へるは、蓋し宗學に不徹底なるのみならず、宗教の妙處を失却し、毫量品の卓越を否認し、開目鈔の三徳尊敬の大事を逸脱するものにして、その波及する所決して尠少ならず、然るに古今この間の會得に就て頗る粗雑なるものあるは、畢竟學解未熟の徒多きが爲めに於て、今日日蓮門下の信仰が、雜然混淆の狀に陥りし源頭は、一にここに存す。眞言宗が萬有神的思想より流れて、雜多の迷信を助長せると、その徑路の酷似せるは、何人にも觀察し得らるべし、教學の正統を光揚せんとする、至醇の道念を有する者は、予のこの言に於て卓を打つて共鳴する所なくんば、あらず、唯だ天下至醇の學徒頗る稀なるは、深く慨嘆すべき所なり。

次に妙は具足の義にして、菩薩行の六度を満足し、又十界互具の義にして、當位當位に於て満足するの義ありと云ひ、又法華經の一々の文字に、皆悉く妙の字を含み字々三十二相の佛陀に異ならざるを示せり、又次に大衆の具足道を請ふに對して、佛の答釋したまへる經文を擧げ、開佛知見の文を取り、衆生の語に於て二乘開提より九界の衆生を網羅せるを明し、佛はこの人開會の義を教ふるを以て本願の満足とうたへるを示し、又次に之に對する大衆の領解の文を擧げ、昔來未だこの大事を聞かざりしを證し、傳教の解説を援引し來り、法華已前の華嚴其他の諸經に於ては、唯一佛乘即ち二乘及び九界平等に成佛を得べき人開會の大教義を聞かざるを助證し、最後に聖人の見解を示して、畢竟未聞の大法とは一代の肝心たる一念三千に就て、その一念三千の歸趣骨髓たる二乗作佛久遠實成の二大教義を聞かざりしと云ふことなりと解す。こゝに一念三千の骨髓を判じて、記小久成の二大教義と爲せる點は、最も分明に會得し、且つ深く牢記して、教義批判の標準となすべし、この義を領解する能はずして、汎々たる宇宙觀上に、一

念三千を扱ひ兼ねて紛論模索するは、真に恥づべきのことなるを記憶せよ。無依無得大乘四論玄義記とは、書名にして三論宗は諸法の畢竟空を明し、之を無依無得と云ふ大乘四論とは中論十二門論百論大智度論なり。吉藏疏の文を妙と書せるは誤寫なり、妙は沙に造るべし。龍樹の事は付法傳の上に云く、滅後八百年に一の大士あり、那伽闍賴樹那菩提薩埵龍猛と名く、迹を南天に誕じ、化五印に被る本を尋ぬれば、則ち妙雲如來なり、迹を現じては、則ち位歡喜に登る。大智度論千卷とは原本に就く、羅什は百卷に譯出せり。善無畏の真言の事は、援引せしに過ぎず。法華經の字數の事は、扶老の二に詳細に計數せり、六萬九千三八四は天台の略法華經に出せるに依る、出三藏記二には、新法華經七卷、弘始八年の夏、長安の大寺に於て、天竺の沙門鳩摩羅什譯すとあり、歷代三寶記八には、妙法蓮華經七卷、弘始八年大寺に於て出ず、僧叡筆受し、並に序すとあり、大周刊定衆經目錄二には、妙法蓮華經一部七卷百七十五紙、右は後秦の弘始七年沙門羅什常安の逍遙園に於て譯出すとあり、開元釋教錄四には、妙法蓮華經八卷とあり、僧祐錄には、新法華經初め七卷二十七品なりしに、後人天授品を益して二十八と成す、弘始八

年の夏大寺に於て出ず、僧叡筆受し、並に序を製すとあり。宋景濂の護法錄九には六萬九千七百二十四言とあり、玄贊要集には六萬九千七百五十四言とあり、明の行教師の音釋には六萬九千七百二十八言とあり、仁岳師の音義には六萬九千六百七十七字とあり。諸説不同あるも、多くは六萬九千三八四と言ふ。扶老には自ら兩度計算して、六萬九千六百四十三字なりと云へり、その詳細は往見せよ。一一の文字即佛なりと云ふに就て、啓蒙に之を解釋して、應佛に寄せて判じたまふ、三身圓滿なれば、應色常住に寄す、止觀八の法報應化四身為本等の釋より起つて、應身為本法報爲迹の料簡あることなり、直雜第十四の如しと。妙樂の尙具の釋は輔行五上に出づ。

日蓮聖人 第一の遺著 開目鈔詳解 (上卷終)

開目鈔詳解上卷

大正八年三月廿日印刷
大正八年三月廿五日發行

開目鈔詳解上卷
定價金 貳圓

著者 本多日生

發行者 株式會社 大鐙閣
東京市京橋區桶町十五番地

印刷者 高桑基次
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十七番地



發行所

東京市京橋區桶町
大阪府南區三休橋詰
株式會社 大鐙閣
電話 京橋一八一三番
大阪南一八〇三番

振替 東京三三六一八番
大阪二七一五五番

大僧正本多日生貌下高著

日蓮聖人聖訓要義

全拾貳卷

(行刊宛册一月毎)

入箱スーロク總判六四
頁百三約數紙篇各
錢拾五圓壹各價定

錢廿鮮滿錢八地內料送

大僧正本多
日生師が

畢生の大著

斯界未曾有
の大力述

第一卷

法華大綱鈔
法華取要鈔
法華修要鈔
如說修行鈔
を含む

既刊

第二卷

安國立正論
開目鈔
を含む

新刊

その説く所生氣潑洩として徹頭佛教をして生きたる人生に體して餘蘊無からしむ、偉聖日蓮聖人の遺書の如き誠に世に少し、然もその文旨幽玄深甚にして世人隔靴搔痒の憾みなならずとせず、大僧正本多日生貌下は斯界の耆宿にして又權威也、今上人の遺文集集に向て一々懇篤なる要義を與へて江湖の渴望を醫せんとなす、蓋し空前の大企劃也。

大僧正本多日生貌下編著

總クローヌ裝幀極美 定價金貳圓貳拾錢
紙數九百頁 送料拾貳錢滿朝廿錢

日蓮宗
唯一の
聖書

聖語錄

法華經は、佛教全藏を調整融會し、之を綜合統一せんが爲に起りたる聖教也。而して日蓮聖人は、佛教諸宗を教誡し指示して積極的統一を主唱したる大導師也。宜なり、妙經及び祖書に顯はれたる教義の旨致、幽玄深遠にして、而も其の記述の極めて多方面に涉獵せることや。故に組織的眼光を以て考究を成すにあらざるは、研究徒らに薄蕙に失し、到底其の眞意を會得することは難かる可し。從來日蓮聖人を研究するもの、及び布教に従事する者、此の考究を閉却したるが爲め、其の眞意を會得したるが如くにして、却つて轍ち亡羊の嘆を抱きたりき。是れ良に日蓮宗教義研究界の一大恨事たらざらんや。大僧正本多日生師は斯界の大立物也。夙に此の缺陷を補はんと欲し、拮据經營數年の歳月を費し、法華經、無量義經、觀音普賢經及日蓮遺文集に就いて、其の要文を類聚し、以て一目瞭然として、妙宗の眞意を知るに容易ならしむ。篇を發心、教相、佛陀、教法、人身、法界、本尊、行法、得益、批判、警策、訓育、祖傳の十三に分ち、更に每篇、章を分つこと十有二三、更に又每章、項を分つこと數十項、其數實に二千項の多きに及ばんとす。而して一々其の出所を明にし、殆んど完全せる辭典風に編纂す。眞に聖語錄の題名に背かざるものと謂ふ可し。

東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行

東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行
東京市橋區桶町 大燈閣發行 株式會社 大燈閣發行

碧瑠璃園著 (最新刊)

◎四六版九〇〇、ポイント製新活字
◎鮮明印刷總クロス上製美裝函入

口繪

日蓮聖人

聖開教人御影及眞蹟 (版色原) 拾八圓貳價

序文 大僧正 海軍中將 日蓮主義 佐藤能 多鐵 日太 一郎

南無妙法會式櫻の咲きにけり……實にや萬燈翳して團扇太鼓の高
鳴る熱狂、其潑瀾たる法華の大精神は千古不滅、聖者六十年の生
涯を物語る史傳の各頁は眞乎吐血叫雲の記録となすべし。流謫の
孤島にありても聖者は怡然として宣ひぬ。「日本國に於て第一に富
める者はわれ日蓮なるべし」と。此歡喜、此歡喜に溢れたる生活は
近代人の胸奥に切に欲求する所、傳記小説の大家、此に畢生の努
力を效して祖師様の一生を描く。情理双絶！

東京大坂 京都南區 橋區三休橋社 株會 大 閣 燈 大 振替 東大 京阪 三二 三二 六一 八一五

324
588

終